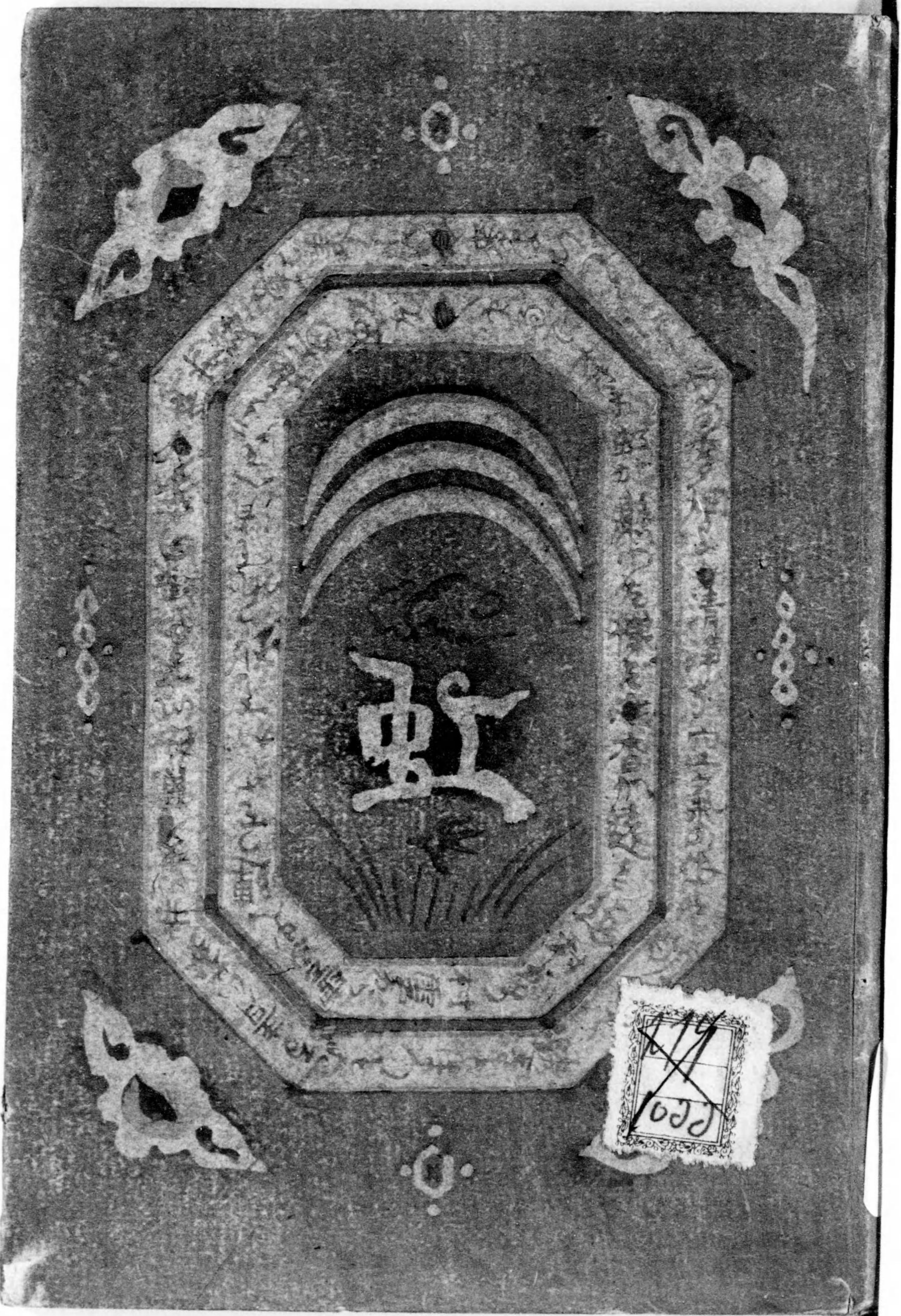
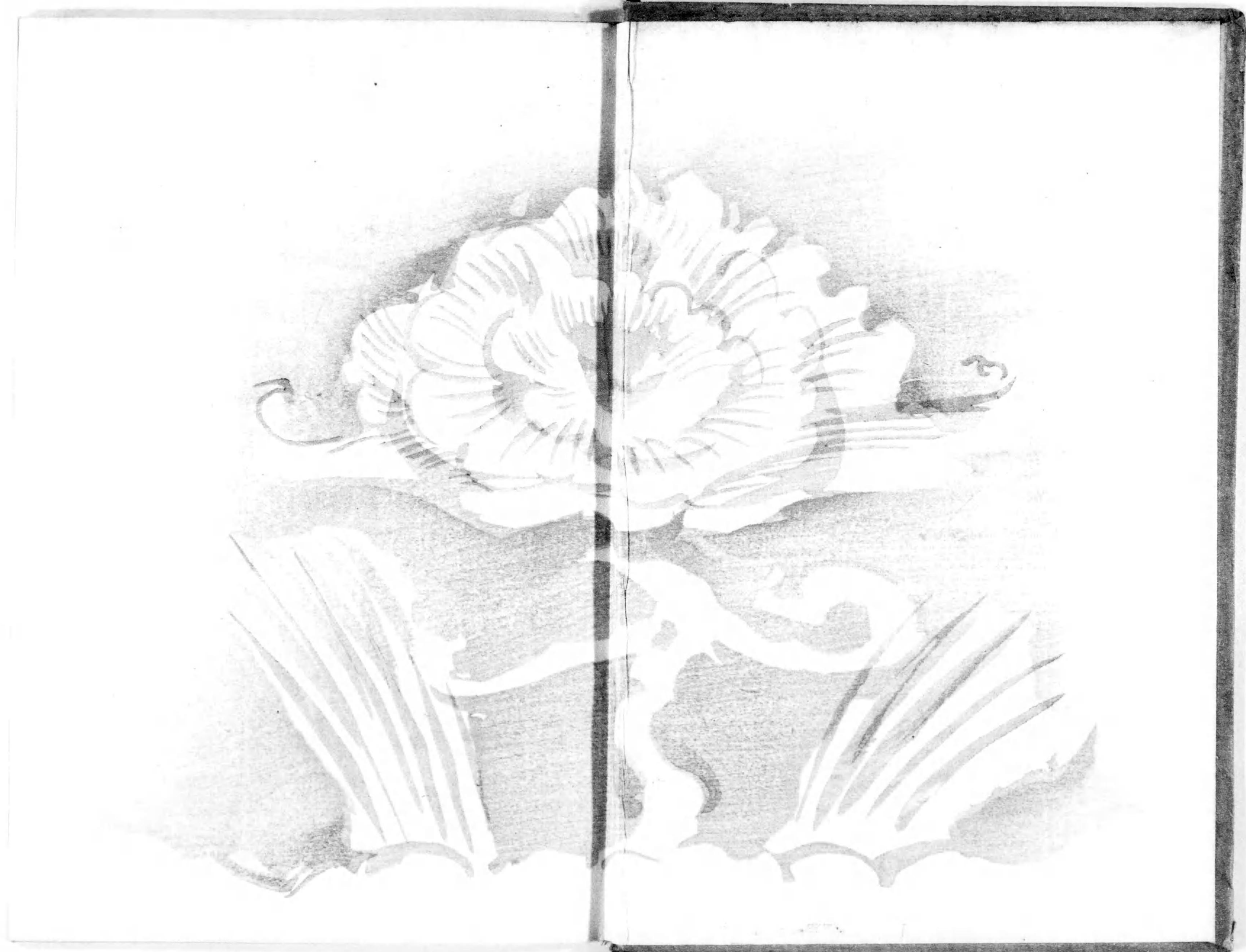
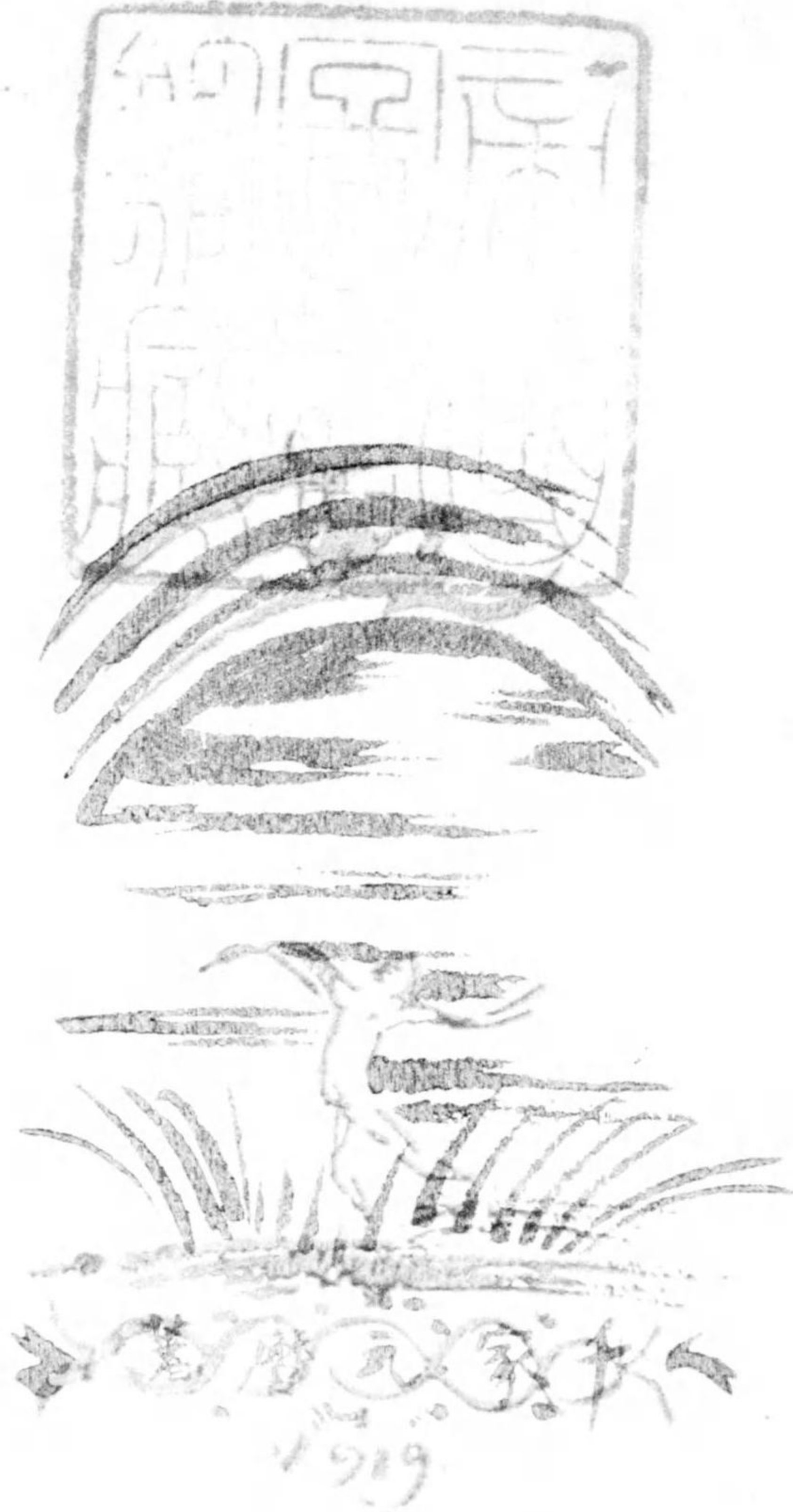


始





特106  
670



大正  
8.9.0  
内交

武者小路實篤兄に捧ぐ

### 詩集出版に際して自序

自分の第二詩集が出る。この喜びよ  
この喜びよ

自分は此の詩集と共に諸君にめぐり會へる

この詩集と共に知つてゐる人とも知らない人とも會へる

オ、この喜びよ

自分はこの詩集と共に甦る

自分の詩集よ、自分の愛する詩集よ

自分は御前の運命を祝福して世の中へ送る

舊知及び未知の人々に贈物とする

愛する人々よ

この詩集を読んでくれ

この詩集の眞價は露骨に諸君の眼にふれて輝くだらう

諸君の心をこの詩集に見出して呉れたら幸だ

諸君の心に少しでも生氣を傳へる事が出来たら

自分は詩集を出す甲斐があつた事を感じ謝する事が出来る

自分の愛する詩集よ、良き讀者を見出して呉れ

自分の愛する人々よ今生れ出たこの詩集を見出して呉れ

自分はこの詩集の前途に幸運のみを考へるものではない

心配や氣遣ひや羞恥や氣臆れを感じないものではないが、それは此の詩集を出版することゝをさまたげない、

およそ良き兒の出産にすら多大の心配が付き纏ふものだからこの詩集はこれにいゝ

自分はお前がどんな運命に出會つても

お前だけの前進を続け、幸福な港へ確かに到着する事を知つてゐる

自分はお前の内にそれだけの力があると思ふ

それは作者たる父のひいき目のみか

自分は謙遜と同時に昂る心を抑へ得ない

自分の愛する詩集よ

自分は御前の出發を熱狂して見送らう

運命は自分の内氣な氣臆れを叱つて出發を促がしてゐる

では愛する詩集よ

良き旅をしてくれ

どこでも良き人々を見出して呉れる様に

自分は祈る

最後に自分はこの本を出す事が出来た小泉兄と八幡兄との非常な世話を厚く感謝する

又この詩集の出版を求めてくれた書肆に感謝する

一九年 月 日

元 磨

目次

創 造	一	夏の日の夢	二六
春の夕	六	遠 足	二九
月 夜	八	ホッホの種蒔きを見て	三〇
眼	一〇	老人の労働者	三三
若者と老人	二	光 り	三三
鴉	三	三人の廢兵と一人の少年	三四
若き囚人	四	今宵吾が家の	三七
生 長	五	雨の前	四〇
五月の朝	六	春	四四
田舎にて	九	嵐	四七
晴れた日	二四	小 景	四九
		曙	五〇
		象	五三

天 啓	.....	五	シャパンヌの繪の寫眞をもらつて	.....	八九
村の郵便配達	.....	六	夕 暮	.....	九三
雷雨の停車場	.....	六	憐れな眼	.....	九五
雷雨のあと	.....	六	子供の時	.....	九六
夏の夜の幸福	.....	六	涼 夜	.....	九六
旅の終りに	.....	六	いなの子	.....	一〇〇
晝の眠り	.....	六	漁師町	.....	一〇一
汽 車	.....	七	鶏	.....	一〇四
輝かしい夜	.....	七	破れた顔	.....	一〇五
御母さん	.....	七	隠れたる者	.....	一〇七
平和よ	.....	八	夜の町にて	.....	一〇八
或る日	.....	八	朝	.....	一一〇
彼は歩めり	.....	八	落 日	.....	一一三

嵐	.....	二五	小さい笑ひ	.....	一二九
若 葉	.....	二六	蜜柑と子供と余	.....	一三〇
夜の人々	.....	二七	雀	.....	一三三
散 歩	.....	三〇	夕 暮	.....	一三四
若 葉	.....	三三	朝の喜び	.....	一三六
調 和	.....	三三	朝	.....	一三六
無 題	.....	三三	乳離れ	.....	一四〇
無 題	.....	三三	風	.....	一四一
空地にて	.....	三三	眞夜中	.....	一四四
同じく	.....	三三	小 景	.....	一四六
同じく	.....	三三	影	.....	一四七
月	.....	三六	草の葉	.....	一四八
蠅	.....	三七	倦まざる力	.....	一四九



母の愛	一五〇	母の言葉	一七〇
富士	一五一	裸の女	一七三
聖なる夕	一五二	人外境	一七五
夕の太陽	一五三	港で	一七七
充實	一五四	散歩	一七八
或る夕	一五七	草	一七九
夕景	一五八	麥島	一八一
太陽	一五九	京都	一八二
港にて	一六〇	妹に	一八四
都會を出て	一六三	自信	一八七
夏は来る	一六三	小景	一八八
一物もなし	一六四	山の上から	一九〇
清らかな景色の中で	一六六	兵隊	一九三

自然萬歳	一九三	氷屋で	一九五
怪物	一九九	汽車の中で	二〇七
星の世界	二〇〇	小品詩	
星	二〇一	囚人馬車	二〇〇
弱い奴	二〇三	蟬	二〇一
雨後の田舎を通過して	二〇五	踏切	二〇三
六月の夕	二〇九	夜	二〇三
虹	二一一	雷	二〇四
詩の朗讀	二二三	雲の行進	二〇六
戀人よ	二二五	電車の中で	二〇八
母	二二七	眞晝	二〇九
喜び	二二八	或る秋の日	二四〇
大なる者	二三三		

虹

千家元磨

## 創造

自然よ

自分は目に見えない汝の力を見る事は出来ない、

然し自分は汝が無遠慮に見る事を許して居るものを見る事が出来る。

春先きから初夏にかけて

自分は日々汝の行ひを見た

然うして今日汝の大きな働きに全く打れて汝を讚美する念が抑へられなくなつた

汝は狂つてゐるのか、祝福して居るのか

一日置きに世界が水にひたつてしまふかと思ふ程の雨を降らす

此世のもので無い寒さと暗さをもつて来る

然うして一雨毎に地上は芽組み

その騒ぎの跡に静かな夜を置いた。

自分は今日雨上りの夕暮外へ出て見た

二  
尙ほの暗い創造の光りが天地を包んで漂つて居た。

天上には澤山のふり棄てられた雲が青白めて漂つて居た。

戦場の跡のやうに亂雑して居た

原に遊んで居る子供が

白い雲を指して「軍艦のやうだ」と云つて居た。

日に輝いた遠くの空のちぎれ雲を「軍旗く」と指して居た。

本當に空は海戦のあとのやうに見えた。

青白い砲臺の崩れたのや

水をかぶつてポコリと現はれてゐる

沈没した船のやうなのがあつた

幾多の漂流物のやうに

雲は破壊されてあつた。

やがて自分達はこの混亂の中に飛び出した

一群の雁に驚かされた。

子供等は「雁、雁」と叫んだ。

黒い龍の如く、泳ぎ渡る水兵の如く

或は戦傷者を見舞ふ

黒衣の尼の如く沈黙して

清い空氣の溢れる中を波のやうに揺れて行つた。

天から斜になつて

百羽餘り通り過ぎた。

その黒い翅には音がなかつた

然しその翹はひろげたらいくらでも巨きく

擴がる翅のやうにつぼんだり開いたりして

天にふれ地にふれて通つた。

空氣は揺れかへり

自分の胸は溢れる心地がした。

自分は天上を見、地上を見た

おう天地は全く共力して居る  
盛んな春をあとにした自然は  
地上を青葉で包まうとしてゐる。  
雨を與へた天はほのぐらい青葉の上に横つて居る。  
四肢を投げ出した産婦のやうに  
地は生れた計りのやうに黒く小さく沈黙し、  
青葉は濡れた髪の毛のやうに日の光を戦いで待つてゐる  
今通つた雁がこぼして行つたやうに  
青い小草が澤山萌え出して居た。  
自分は寒氣がしてふるへた  
自分はほの暗い創造の冷たい光りの中に  
目に見えぬものゝ大きな漂ひを感じた  
自分は汝の行ひ、汝の運動を見て  
知り、教はり、働かうと思つた

天と地は共力してゐる  
黙して働いて居る  
然し未だく盛んな夏になるには十分で無い。  
自然は靜かに休んで  
再び働かうとしてゐる

## 春の夕

太陽は靄の中で

月のやうに大きく薄赤んで居る

太陽が落ちるとすぐ

月の光が射して来るのだ。

櫻の上には月の光りがもう淡く流れて居る

静かな地面に木の蔭が映つて居る。

晝と夜のけぢめもつか無い

長い黄昏の明りの中で

子供が鬼ごっこをして居る。

赤ん坊を脊負つて鬼になつて居る男の兒

一緒になつて走り廻る幼い兒

笑つて見てゐる女の兒

彼等は眼のやうに流れる自然の中で喜び勇んで居る。  
太陽が消えない内に射して来る月の光のやうに  
静かな生命が透いて見える。  
祈りたくなる様に美しい。

## 月 夜

騒がしい不安な風の空に  
月がのぼつて居る。

葉の茂つた細かい木が風に吹かれて  
箒のやうにくつきり空に戦いてゐる

月は道の眞正面の空にある

月の下は海原のやうに明るんで居る

飄々と細い雲がのぼる

月の方へ、明るみの方へ

人が歩いてゆく

子守兒が多い

一杯全身に光りを浴びて居るのも知らないで

呑氣相に二三人で話し乍らのろく／＼歩いてゐる。

眩し相にうつむいた人妻が一人いそいで通つた。

うつむいた蔭の顔は少し笑つてゐた

月を脊にして行く人は

時々ふりかへつて月を見る

月のさゝない暗い横丁へ曲つた時、うしろで

リン、リン、リンと鈴を鳴らして

乗合馬車が通る賑かな音が聞えた。

## 眼

春の夕の巷の上に  
光り輝く燈よ  
おう汝の光りを見てゐる  
もう一つ大きな目が輝いて居る  
きつぱりと流れて行く眼がある  
それには誰も氣がつかない。

## 若者と老人

無遠慮な若者は  
電車に乗るのにも  
つむじ風の如く権利を以て乗つた。  
然し老人の夫婦は  
幾度も行き先きを尋ね  
けんそんに静かに  
助け合ひつゝ乗つた。



鴉

太陽は疲れて  
雲の上に載つてゐる  
線香花火のやうに  
落ち相な火玉となつて  
芒のやうな閃光を二三本發して居る。  
道端の林の中に  
一羽の烏が太陽の方に向いてぢつとして居る  
もう日が暮れるのに鴉は飛ばない  
啼きもしない  
死んでゐるやうに動か無い  
それが氣にかゝる  
石をほうつてやらうと思ふと

すぐ側の谷間の林から又一羽バタ／＼と飛び出して林の中に一緒になつた  
然し二羽の烏は啼きもしない  
動きもしない  
一緒に軀をすり合はせもしない。  
涼しい夕方の空気を浴びて  
いつまでも  
そのまゝ暮れる様にぢつとして居る。

## 若き囚人

監獄の煉瓦壁の上から

二十二三の若い囚人が

世間を覗いてゐる

その桃色の半面は美しく燃えてゐる。

彼の心は遠くへ飛んで居る。

## 生長

木が若葉をつけ

静かに、氣永に

然し見る／＼内に

育つてゆくのを見ると

自分がかうしてはゐられ無い

無駄な時間を費すのがたまた無い

およそ自然は時間を浪費しない

## 五月の朝

朝は感謝の心に燃える  
殊に五月

淺黄空に若い太陽は輝き  
織る様に人の通る道も  
人氣無い徑も  
どこを歩いても心は賑ふ。

毎日通る道も

眞白く清められて

新しく人の目を惹き

何ものか心に忍び入る如く  
暫く會はない

違き人々をも思ひ出して  
心は楽しく世界は賑ふ

おう若々しき五月の朝よ

男も女も若きも老いたのも均しく

活氣づきて

清い空気の中を

そよぎつゝ歩みゆく時

われは感ず、祝祭の如き喜びを

おう五月の朝明けの空の若々しさ

雲は靜かに現はれ來り

高いところを小さく列りつゝ幽かに滑りゆき

天地は靜かに行列しつゝ

運行す

一八

田舎にて

一日一日と夏が深くなる

一日一日と空が高くなる

地上に近く下りて来て

春から一生懸命働いた空は

先づ爲す可き事をし終つて

ぐんと高くなる。

地上ではすばらしい天気が續いて麥刈が初つた。

雲雀は巢を失つても

雛は空に舞ひ上れる程元氣に揃つて羽が生えた。

親子揃つて朝から晩まで島の上で

四邊構はず陽氣に啼いて居る。

一九

思ひ切り高くなつた涼しい空へ  
息もつかずに一氣にのぼる。

二〇

太陽は今日一日の旅を終つて  
自分の歩いた道を顧み乍ら  
靄に包まれて休んで居る。  
もう力を出さ無いで静かに落ちて行くのだ。  
熟し切つて赤くなつて居る。

百姓は美味を含んだ空氣の中で  
露の下り無い前に

いゝ天氣に伸び切つて、よく乾いた桑を切つて車に積んで運んで居る。  
太陽の耕し通つた道は  
馴れるだけ馴れ深く清められ  
桑切る人の心は躍り

車を曳く人の心も勇む。

空氣の中には目に見え無い深い弾力がある。  
其處を通る人は自づと活氣づく  
何かに觸れたやうに生々する。

夜は静かに何事も無く暮れる  
朝夕が全く静かに來り迎へられる。  
地上は暗くなつても空は明るく  
何處の家でも昨日の夕方の様に  
澄んだ燈がきつぱりとともり  
驚く程大きな聲で人々は話し  
子供も老人も皆んな外から歸つて  
貴い客でも迎へた様に  
家の内までも甘い草木の匂ひがたゞよひ

二一

鳥ではもうとつくに雪雀は黙つて  
一匹も啼か無い蛙は無いやうに  
遠い田甫の蛙も近い田甫の蛙も  
何千何萬の蛙が賑やかに昨夜と同じ歌を繰り返へし  
高い空では遠い星と近い星が出會つて  
夜は平和に更けて行く

大きな百姓家の戸口の闇に佇んで  
空を見乍ら涼んでゐるまるで透き通る様な百姓の女は何を考へて居るのか  
何をその頭の中に浮べてゐるのか  
來る日も來る日も變りの無い  
その單調な頭の中に何か閃めき浮んで居るのか  
何處に戦争があるかと思ふ  
この大きな空間の何處に缺けたものがあるのかと思ふ

この高くなり切つた空の高い高いところで光りを跳ねかして居る小さい星を見れば  
人は何かを微かに豫見した様に感じる  
大きな空間はだん／＼妙に明るくなつて  
戸口に涼む人も家の中へ引込んで  
萬象が寢鎮つた眞夜中になると  
海原よりも大空よりも大きな月が現はれる。  
山河にはわあと云ふ狂ふやうな  
喊の聲が満ちて  
月は心氣充進して輝き登る。

## 晴れた日

美しく晴れたる日には  
蜂はその巢を飛び出し  
花を尋ねて、蜜を集める。

美しく晴れたる日には  
鳥はその巢を飛び出し  
空に消え入る。雲より高く

美しく晴れたる日には  
吾は幾度も家を出て  
友を尋ねて、野を歩く

美しく晴れたる日には  
萬物競ひ、憂苦を忘れ  
束の間の時も出来るだけ  
貴く過さうと考へる。

美しく晴れたる日より  
楽しい時は吾に無し  
美しく晴れたる心より  
嬉しきものは吾に無し

## 夏の日の夢

二六

女房と子供の事から喧嘩をして  
家に居るのが急に厭になり  
薄暗い家を飛び出せば  
不思議に胸かシーンとして  
ふりそゞぐ日の光り  
樹や道が皆んな髪をとき流して  
白いレースを冠つて透きとほつて明るく行列して居る。  
思ひ出したぞ  
何んでも今日は高貴な方の御輿入の日に當るに違ひ無い  
婿様が御通りの御道筋は  
眩しいやうに輝いてもう御人拂ひになつて居る。  
據る無く通る人は織る様に小さく行列して

地の一端を歩いて居る  
皆んな恐れ入つて決してムダ口をきか無い  
天地は全く無限の調和の境に入らうとして  
人は魔氣に襲はれて眠くなる。  
見上げる様な空には御祭りの飾りのやうな明るい雲の群が浮んで  
花火の中から飛び出した紙人形のやうな女が  
蝙蝠をさして二つ三つフラ〜と  
空の宮殿から下りて来た御腰元にちがひない  
何かいそぎの御用か、買物に、人氣ない町をこつそり歩いてゐる。  
無禮があつてはなら無いと頭の上を見え隠れ忍びの鳶の影が爽やかに舞ひ乍らつけ廻  
り  
この燃ゆる夢の國を横切り  
太陽は無窮の上から  
巨大な眼に優しさを一杯ふくんで

二七



眞下に地球を見下ろして  
 夜も地球の傍近く御泊りになるので  
 靈妙な涼しい光りに  
 地球はまるで透き通る。  
 とても勿體なくて見ではいられない。  
 こんな日にうつかりうろついで  
 怪我、過ちがあつてはならぬ  
 家へ歸つて女房と仲直りをしておとなしく  
 戸のふし穴からでも御婚様の御通りを拜んで居やう。

## 遠 足

小學校の遠足の行列が通る。  
 先頭の方が男の組  
 うしろの方は女の組、  
 可愛相に埃をかぶる。  
 いろ／＼のパラソルがヒラ／＼する。  
 空には夏めいた雲の群  
 しなやかに行列は動いてゆく  
 糸でつないだ花が轉がつてゆく様にうねつて行く  
 列を飛び出しては道端の草花を摘んで  
 又列に加つて靜かに歩いてゆく一群の子供達

### ホツホの種蒔きを見て

三〇

ホツホの種蒔きはすばらしい速力で歩いてゆく

天も地も燃えて種が一時も早く置かれるのを待つてゐるやうだ。

あの空なら光りをそゝぎ雨を降らす。

あの地面なら種は生える

蒔いてゆく種がすぐあとから、あとから

萌え出して行くように地面はぬくんである。

種蒔きはそれに遅れ無い様にすばらしい勢ひで歩いて行く。

シャツのボタンをはずして渴いた喉を現はし

顔色は血の氣を失つて唇は血を出す様に結ばれ

帽子の影のたつた一つの眼は見開き切つて

前途にそゝがれ

その一つの眼は全畫幅の焦點のやうに輝き

握り拳から種を散らして一生懸命に歩いて行く  
その足の早さ。

天も地も人も一緒になつて負けずに働いてゐる。

おゝあの焔をあげる空

地面はよく見れば實に無数の色素を含んでゐる

柔く優しく深く、本當に母のやうだ

見てゐると涙が湧いて来る、唇が乾いて来る

怒鳴りたくなる。

だがそれを押へつけて、優しく悲壯な恐ろしいこの繪！

恐ろしい天才のシンボルのやうな種蒔き。

三一

## 老人の労働者

三二

黙つて老人の労働者が町を通る。  
誰にも慰められ手がなさ相な老人だ。  
汚ない夏帽子をかぶつて日の射さない蔭になつたどぶの側をだらしなく通る。  
あ、その肉體を見ればそれを讚美する氣は起ら無い  
然し彼の心の内はどんなに強く光つてゐるだらう、  
自分はそれを信じる。

## 光り

三三

どこからか優しい光りが来る。  
どこからそれは来るのか知ら無い  
月のある高い高いあの空からか  
どこからか人の心にさして来る光り  
あゝそれは此世のどこかにすばらしい大きな寶が埋めてあつて、それが人に見出され  
無い爲めに光つてゐる、その光りでは無からうか。  
だん／＼にその光りは強くなる。  
だん／＼にその光りは冴えて来る。  
あゝ其の光りは人の眼に涙を浮かせて来る。  
誰かその寶物の埋められた在家を探し出すのも  
遠い事では無い氣がする。

## 三人の癡兵と一人の少年

三四

今日友を送つて歸り道

橋の上に来ると

自分のうしろから

盲の父の手をひいて九つ位の少年が來た。

二人とも黙つて居た。

少年は父と歩みを合はして

のろ／＼と歩き乍ら

四圍の青葉の景色を眺めてゐた。

その顔は美しかった。

透きとほる様に薄赤んでゐた。

父の方は何か考へてゐるのが鼻の先に現はれて居た

顔色も悪かった。

然うして黒い眼鏡が異様にその顔にのせられてあつた。

それは傷病兵なのだ。

多分癡病院へ夕飯を食ひに通つて行く途中なのだ。

橋の上にはもう二人傷病兵が居た。

一人は眼の下が火傷でひつ／＼りになつて奇妙な眼付をしてゐた。

一人はづんぐり肥つて飽／＼した様な顔をして居た。

然し何だか二人ともやつと傷が癒えたと云ふ様な生々しい感じがした。

自分は怖い氣がした。

普通の病人とはまるでちがつた感じがした。

自分は沈んだ氣持になつた。

悲しい氣がした。

だが父の手をひいた少年を見て心は慰められた。

その顔には此世以上の美しくしいものが現はれて居た。

それは自然な表情だ。

三五

それこそ此世になくはなら無い表情であつた。

健全な理性で考へられる顔であつた。

その父は何を考へてゐたのか

その黒眼鏡をかけて沈黙した顔には自分は何も認められなかつた。

只恐ろしい運命の反影を見る様な気がして悲しくなつた。

恐ろしい戦の夢から未だ覺め切ら無いやうな表情を自分は外の二人の癡兵に見た。

二人が立つて眺めてゐる平和な風景は

何を語つてゐたのか。

自分は夢のやうに戦場を思ひ浮べてゐたのではないかと思つた。

## 今宵吾が家の

おう今宵吾が家の内の明るさよ

三つきり無い室は皆宮殿の如く擴がつていづくの室も、

輝きに満ち渡れり

妻子は臺所に、吾は書齋にありて

このすばらしい明りの中に電光の如く心をと替したり、

おう今宵吾が家の内の明るさよ

久し振りにて僅の賃錢を得たる貧しき家の如く

すばらしい光はいづこにも輝き渡れり

くすみたる壁、破れたる障子のかげより

隠れたる光の主は現はれ給へり

おう今宵わが家の内の明るさよ  
 吾この喜びを妻子に分たんと欲す  
 心苦しめる妻よ、月末の拂ひを案ずる勿れ  
 妻よ、汝の病ひは癒やさる可し  
 妻よ、子の未來を煩ふ勿れ

おう今宵吾が家の内の明るさよ  
 隠れたる光りの主は吾が家のほとりを通過し給ひ  
 吾等が日常の悲しみをその光れる劔にて拂ひ給へり  
 貧しき吾が妻子よ、案ずる勿れ  
 吾等が未來は目くらむ計りの輝きに満てり

おう今宵吾が家の内の明るさよ  
 吾等は輝ける白刃をもちたる大使の内に圍かこまれたり

さながら太陽は壁一重のところにあるが如し  
 おう今宵吾が詩は夥しく成れり  
 吾この喜びを人々に與へんと欲す

## 雨の前

自分は田の畔を歩いて居る  
空にはどこかで降つた名残の雲が續々と流れ來り  
その方向の切れ間から靜かに白光の鏡が照つてゐる  
そこから涼しい風が吹いて來る。  
自分の行く道のほとりに星の冠を戴いた髭のある葱や  
梳き流した髪の上に簪をさした穂の出揃つた麥や  
名も知ら無い莖の太い苺のやうな黄ろい花をつけて  
皆んな勢揃をして涼しい風に吹かれてゐる  
雨の來るを待つて居る。

ひろい田の中の道は人が彼處此處にいそいでゐる  
大工がある、書家がある、學生が行く

行列してゐる一家族もある。夫も妻も子供を一人づゝ抱いて居る  
彼等は今にも降つて來相な空の下をいそいでゆく  
その中に大きな體の百姓がいろ／＼の形をして土に親しんで居る。  
雨の降つて來る間際まで仕事を止めずに落着いてゐる  
大きな尻を空へ向けて曲んで畠の草をむしつて居る女や  
自分の鼻を見廻つてゐる脊の短い百姓の笑みを含んだ日に焼けた黒い頭はまるで植物  
のやうだ。熟した葡萄のやうだ  
それ等の人々は皆んな植物の中から現はれた神の顔のやうだ。  
麥は彼等の衣で葱の玉は彼等の冠だ  
かゝる神々はあち、こらちに働いてゐる。  
田の畔で一人で草を刈つてゐる百姓も笑つてゐる様だ  
遠くつて顔は見えないが心があり／＼見える。  
彼等は恐悦してゐる神だ。  
皆んな他の村から流れて來る雲を喜び、亢奮して眺めてゐる。

島の中の小さい水溜めのほとりには

鼻垂しの子供が集つて木綿糸で釣をして居る

赤ん坊を脊負つて土の上にぢかに腰をかけて居る

赤ん坊のニョツキと出た足は地面につかへてゐる

その十二三の男の子は脊負つた子供ととけ合つて

一團となつて、その二人を生んだ母のやうだ

初め見た時は女かと思つた、二人分一つに見たのだ

その側にちやんと母がくつついて見守つてゐる様だ

濁つた水の中では人が居るのも平氣なもので

無数の御玉杓子が大きな頭を動かして浮き上り水面に届くと

今度はまつ逆様になつて尻ばを振つて沈んでゆく

雨の降る前兆と蛙になり變る運動をくりかへしてゐる

見てゐると可笑しくて御玉ぢやくしも笑つてるやうだ  
 子供は鮒のかはりに菜屑を釣つて喜んで居る  
 雲はどん／＼流れて來るが白い鏡はます／＼光つてゐる  
 水の面も妙に明るくなる  
 どうやら雲は過ぎて行き相だ。



## 春

四四

わが側に妻と兒は健やかにあり  
戸外には美しく春が來た。  
自分達の心を惹き立てるのに  
かうも凡てのものが揃つて居るのだ。  
春は地上を大洋の様に湧き立たす  
青空の膨れた暖い波は靜かに天地を洗つて居る  
春は天地の墻壁を打ち破つた  
滯りなく通路が出來、封鎖された氷の港は開かれた。  
とう／＼戸外で一日過せる時が來た。  
自分達をあれだけ困らした冬の泥土は不思議の様にあとかたもなく去り  
日光を浴びた大地からはもう乾いた埃が立つてどここの道にも人が闇がしく歩いてゐる。

皆んなどこか晴々してゐる。  
日光の靜かさや空の靜かさを見ただけでつまら無い事は消してしまふ  
それだけ人は敬虔になる  
遠い町を通る車の音が鳥が群れて啼き渡る様に聞える。それを聞くと自ら心が賑つて來る  
おゝ春、春は希望の色だ。  
人間にも草木にも希望が見える  
人間も草木も眩しくなる  
戸外で一日過せば健康も希望もとりかへす  
自分達は遊び暮らした一日を悔まない  
眠る時には明日の天氣が氣になる許りだ。  
戸を開けば糶糊たる空に、あゝ遠い所に  
騒がしい小さな星がかたまつて出てゐる  
明日の天氣も大丈夫だ

四五

急いで戸を締めて元氣よく寢床へ着くと  
あゝ安らかに眠れる春よ  
胸に希望を抱いて眠りに着くのは喜びだ。

## 嵐

彼女は一人の子供を脊に負ひ  
二人の子供を兩の小脇に抱へて家を飛び出した。  
嵐は彼女は家の屋根を剥ぎ取り壁を崩した。  
彼女は家が微塵に碎けて飛ぶ魔の翅の様な凄い音を空中に聞いた。  
彼女は闇に圍れ、雨にぐしよ濡れてその着物は身體にへばり着き彼女の髪は亂れた  
天地は崩るゝ許り大音響に満ち  
天地は共に動いて居た。  
天は嵐と雲と飛び、地は川が汎濫して流れは早く彼女の膝を隠した。  
三人の子供はおびえて聲も立てなかつた。氣を失つてしまつた。  
母は流れ来る家の破片や材木や樹木に傷つけられて闇の中で進路を塞がれた。  
彼女は一人の女の子の髪を口に食はへ  
自由になつた片手で寄せて來て障害物を掻き分けて進んだ。

されど人力限りあり

彼女は力盡きて小脇にかゝへた子供を水にとられた。

狂氣の如うになつた母は尙も二人の子供を脊負つて嵐の吠へ狂ふ中を突き進んだ

夜が明け離れ、村人は淺瀬の上に正體も無く倒れてゐる彼女と子供を見出した。

脊の子供も髪でくはへて來た女の子も無事であつた

けれども母は全身に傷だらけとなり

子供の髪をくはへて引張つて來た口は

兩側の齒の根がゆるんで皆んなぐらく／＼になつた

嵐は樹の根をゆるめる様に彼女の齒までゆるました。

## 小 景

上野公園を出て來て廣小路の方を眺めた

火の海である。火の河である。地面がまるで見え無い

あつち、こつちに火の建物が立つてゐる

その火の流れの中を人々が練り歩いてゐる

ガラス窓がキラ／＼と光つて變る火の雷車が幾臺もノロ臭く通つてゐる。

## 曙

五〇

朝町の兩側の家々は未だ戸を閉ざして居る  
往來は波打際のように幅廣く黒々と濡れて居る  
人氣無い寂しさと静かさが溢れて居る  
早起きした人が都會の方へ、又都會の方から通る  
皆んな黙つて口をつぐんで一人づゝ通る  
天地にはまるでもの音が無い  
人の心には何か生きてゐる。深い決意がある  
日はほの暗い遠い波濤を見渡す様な  
黒い無限の奥から  
幽かに現はれて来る。  
その光りの寂しさ  
日の方へ向つて行く女がある

彼女は色の褪めた袴をはいて、包みを胸にかゝへてゐる  
どこかの事務員か何かだらう  
こんなに早起きして  
子供や年寄りの食べるものをつくつて置いてから  
急いで出て来たのだらう  
彼女は未だ時間もあるので餘り急が無い  
遙かに暗い奥から一線の日光が  
黒々とした町の中央へ洩れて來てゐる  
その薄い弱々しい光りの中へ彼女は半身を現はして歩いてゆく  
その寂しい光りに静かな憂愁のある顔をぬくめつゝ  
寒い寒い朝明けを都會の方へ歩いて行く  
彼女はだん／＼急いで行く  
日の光りもだん／＼急いで登つて來る  
彼女が都會へ入つた頃

五一

太陽は町々を輝やかすのだ

## 象

動物園で象の吼えるのを聞いた

象は鼻を牙に巻きつけて巨きな頭をのし上げて  
薄赤いゴムで造つた様な口を開いて長く吼えた。

全身の力が高く擡げた頭に許り集つて仕舞つた様に

異様な巨きな頭が眞黒になり隠れて居た口が赤い焰を吐いた。

その聲は深く、寂しく、恐ろしかった。

象は一息吼え終ると鼻を垂れてもとの姿勢に戻りぢつとして居た。

實に凝つとして居た。二本の巨きな前足が直立して動かなかつた。

細い眼を眞正面に据ゑて動かなかつた。

その眼の静かさは人を慄へ上らせた。

二分三分、四分位経つと再び象は鼻を口の中へ巻き込んで食はへた。

然うして異常な丈となり、不思議な痛ましい曲譜を吹き鳴らした。

ブル／＼と震へて何處までも登つてゆく様なリズムがあつた。荒々しい、然し無限な悲哀を含んだ此世の聲とは思へなかつた。遠い原野をさまよふものゝ聲であつた。争ふ様な祈る様な、何者か慕ふ様な幼ない聲であつた。象は長く吼えて力が盡きると又もとの姿勢にかへつて凝つと静まり返へつて前を見詰めて居た。

その古びた灰色の脊骨の露はれた姿は静かさに満ちて居た。限り無く寂しいものに見えた。

自分は黙つて彼の姿を見て居た。自分の眼には涙が浮んだ。

彼は何か待ちのぞんでゐるやうであつた。

此世の寂寞に耳を澄ましてゐるやうであつた。

何か催すのを待つてゐるやうであつた

聴て彼は又何ものにか促されて凄じい姿となり、巨頭を天の一方に捧げて三ベン目を吼えた。

四へん目を吼え終つた時、彼はその鼻で巨きな禿げた頭の頂きをピシヤリと音の發する程嬉し相に叩いた。

何か吉兆に觸れた様に。

五へん目に彼は又空に向つて何ものか吸ひ上げる様に吼えた。

轟く雷か波の様に音は捲きかへして消え去つた。

それからもとの姿勢に戻つて習慣的に體を前後にゆさぶり初めた。

足も鼻も尻尾も動き出した。

彼はもう吼えなかつた。

## 天 啓

五六

自分には時として狂風が起る  
景色の中を歩いてゐる時等殊に起る  
子供は家の中でも毎日起してゐる  
木の葉の様に吹き捲られてゐる。  
あれは靈感だ。颯爽として起る  
天から降つたのか、地から湧いたのか  
突然に湧き起るインスピレーションである。  
畫家はこの時目に見てものを發見し  
詩人はこの時心から歌ふ  
かゝる靈感なくして自分は一筆も書けない  
かゝる瞬間本當に自分は生きてゐる  
人は太陽を眺める、星を見る。大陸を見る。

他人を見、女を眺める。  
然し眞にそれを見る時はすく無い。  
突如として人はそれを見る  
人は吹き飛ばされる。  
宛ら自分の位置を轉換された様に  
颯爽として彼、我の存在を感知する。  
かゝる瞬間の喜びよ、法悦よ？  
日常生活の蔽ひは碎け、人は神の中に攝取される。

(九月)

五七

## 村の郵便配達

五八

村の郵便配達は深夜の雨の中を遣つて来る。  
角燈を片手にさげて  
全身鱗のやうに雨と光りにたら／＼濡れて  
鎧を着て遣つて来る。  
うしろには銀の征矢を一杯脊負つてゐる様に  
篠突く雨が入り亂れ  
寝鎮つた家の前に息をはずませて立止る。  
眠つたところを起されて、恐々戸を明けた人は  
闇の中に飛沫に打たれて明るく立つて居る彼を見る。  
人氣無い山道や森や畠の中を暗い雨夜にたゞ一人  
永い間黙つていそいで來た彼は  
淋しさや恐ろしさや村に辿り着いた嬉しさに

心氣亢進して輝くやうだ。

黒い頭巾の蔭のその顔は燃え上つて透き通つた瑪瑙めうの様に赤るみ  
異様な大きな清しい眼を光らして  
鱗の様に光りの流れるカツパの蔭から貴さうに手紙や葉書を取り出す。

雨はざん／＼降りしきり

郵便配達は熱い息をはずませ、受取る人も沈黙し  
闇と光りの中で眼を集めて選り分ける濡れない葉書や手紙の美しくしさ  
光りの中に浮んで闇に消え入る人の宛名の美しくしさ  
人はその中から自分に宛てられた手紙を受取つて感謝する。

村の郵便配達は暗い雨夜を只一人  
カツパの蔭に角燈をひそませて

寝鎮つた村を一人で輝き横切つて行く

(一九二八、六、二二飯能中山にて)

五九



## 雷雨の停車場

六〇

雨が降る

雷が鳴る

稲妻が光る

神が高い天上から闇の底の都會を照らして眺めて居るやうだ。

停車場を目掛けて自働車が雨を冒して走つて来る

光りが雨を貫け無いで吹きつけられて粉を吹いてゐる

とまると中からおびえた女が飛び出してすた／＼奥へ行つてしまふ

自働車はとまつても息をはずましてゐる

汗をだら／＼垂して居る

どこかに雷が落ちたらしい

濡れた人が頭をちぢめて建築物の下に駆け込んで来る

停車場の中は人氣がない

硝子窓から覗くと構内は暗と光りに輝いて居る

火事のあとのやうだ。蒸氣の湯氣と煙か風に朦々とさらはれてゐる

無数のレールが濡れて火のやうに光つて居る

彼處此處に機關車が鱗の怪物のやうに横つて居る

赤い角燈をさげて潜水夫のやうな黒いカツパの頭巾を冠つた驛夫が

煙と光りと闇の中に現はれては天上へ消える

アーク燈に風が入つて消え相にハタ／＼してはすぐ暗くなる

その度びに構内は一時に闇黒となる

建物の中はシーンとして

人氣なく秋の夜の沈黙に沈むでゐる。

(一九一八、七月)

## 雷雨のあと

★二

雷が鳴った、

雨が降った。

電光が闇を破った。

地は白熱した光りに炎えた。

それは烈しい美だ。

雷も雨も天上の火も去った。

空の高い奥へ隠れた

程経てから樹が身ぶるひをした。

雨垂れがトタン屋根にバラ／＼一齊に落ちた

さうして静かになった。もう一雫も落さない

未だ静かな宵の口だ。

自然は再び進行を初める

悠々と動いてゆく。

外を人が一人ゆつくり通った。

★三

## 夏の夜の幸福

六四

夏の晩は實に幸福だ。

子供でも妻でも友達か戀人とでも  
並んで歩くと

幸福を一杯有つてゐる様な氣がする

大きな天は自分の氣を強くする。

どこを歩いてても蔭を出れば

胸のままで照らされた様に、星か月に顔を照らされる。

歩くだけで十分幸福が味へる。

凡ての苦勞は忽ち忘れてしまひ

自分がどんな小さな人間であつても氣にはならない

大きな天が凡て償つてくれる。

自分は只見て、楽しんで歩けば澤山だ。

## 旅の終りに

汽車は疾驅する

暮色漂ふ田園を貫き

燈の入つた都會へ

窓の外はもう暮れて

遠近に燈が見える。

村があるらしく溜つたのや

星と見違へる様に一つ遠くとび離れたのや

靜かな燈か疎らに地平から跳り出す。

向ふの窓側に二人の女がゐる

一人は十二三の少女で一人はその附添の女らしい

二人は窓外を見乍ら唱歌をうたつてゐる。

ふと口に湧き出して我を忘れて歌つてゐるらしい

六五

二人は體をつけこしてゐる。手を握り合つてゐる  
どこか幸福な家庭の人達だらう

二人は仲善しなのだ。

二人は主従の關係を離れて親しみ合つてゐる。

そこだけ開けた窓から田園の空氣が流れ込む。

汽車は疾驅する

長い汽笛を鳴らして

ゴロ／＼と短い鐵橋をいくつも渡り

人々は腰掛けから立上り、下車の用意にとりかゝる

あつちこつちで窓の戸を下ろして首を突き出す

棚から荷物を下ろす。落着いて坐つては居られない

窓の外にはもう町並が見える

飛ぶ様に通り過ぎた踏切場には無数の人が群れて居た。

その中に荷車を曳いてゐた少年が何か汽車に向つて云つたのが目についた。

電車の中で自分は先刻の二人の女と又一緒になつた。

二人はもう歌はなかつた。

こみ合ふ隅の方でつり革にぶら下つて冷たい顔をしてゐた。

車中の人は無言を守つて居た。

意地悪さうな沈黙が自分の心をおしつけた。

## 晝の眠り

六八

室に入らうとして  
戸口に立つて自分は見た  
妻と子は晝の明るみの中に  
布團を掛けず眠つてゐる。  
寝轉んで戯れ合つて居乍ら  
そのまゝ眠つてしまつたのだらう。  
二人の眠つてゐる方かくか異ふ  
二人は相抱いて眠つてゐると思つて安心してゐるのかも知れない  
然し二人は同じ方に頭を向けてはゐない  
寢てゐる間に自ら變つてしまつたのだらう  
二人の側には雀つた草花が散つてゐる  
子供は左程眠りたくはなかつたのだが

母に口説かれておとなしくつき合つて眠つたのかも知れない  
それとも母の方で子供に誘はれたのか  
二人とも今は深く眠つてゐる。  
オ、その静止した姿の美しくしさ、無邪氣さ  
二人を誘つた眠りが二人を神聖に守つてゐる  
戸口に立つて自分は見た  
さて靜かに戸を閉ざして去つた。

六九

## 汽 車

自分は林の中に休んで居た。  
太陽は若葉の茂みを通してきらめいて居た  
その時、眞晝の深い静かさの中を  
汽罐車か猛り狂つてゆくのを聞いた。  
まるで荒れ狂ふ年老いた王のやうに  
破るゝ許りに苦るしい動悸をはずませて  
後ろ向きになつて苛々した身振りで  
命令し、號令をかけつゝ  
そのあとからすてきにのろい速力で  
黒い貨車が従者のやうに  
一臺づつ、沈黙して、ゴト、ゴトと  
黙つてついで行つた

まるで涙ぐみ、疲れて  
狂亂の王の運命を悲しむやうに  
自分もその狂亂の王か  
静かさの溢れる森や太陽や  
その中に浸る自分の静かな深い眞晝の心を  
つんざいてやつと進んでゆく  
破れ相な喘いだ内の動亂に感動し涙ぐんだ  
心あるものは至る處に恐ろしい生の行進を聴くのだ。

## 輝かしい夜

七二

自分の留守に誰か来てゐる  
机に向つて何かしてゐる。

それは母であつた

二月以上會はなかつた母であつた。

多くの弟妹を田舎へ送つた日から會はなかつた母である。

「いつ來たの」

「もう少しで歸るところでした。あなたが御出掛けになるとすぐ來たの、御隣りの方に  
御深切になりました、御茶をいれてもつて來て下さつたり、」

二人は興奮した。氣が狂つた様に

母も自分も顔を見合はすのが恐かつた

室の中を歩いて立つたまゝ大きな聲で話した

別して母の聲は大きかつた。

自分が茶を汲みに立てば母はすぐ立つてうしろへついて來た

さうして母は饒舌つた

自分は苦るしくて黙つて許り居た。

云ひ度い事は云へずに餘計な事許り云つた。

二人とも涙ぐんでゐた。

二人とも變になつて居た。

父が亡くなつてから後のさまぐの變遷を二人は話した。

田舎へ行つた澤山の弟や妹の事を話した

二人は黙つた。御互の思ひは分つてゐる

父が生きてゐたら如何んなにいいだらう

母は話の途中でしげく自分の顔を見た。

自分は眼を反らさうとしたが。黙つて顔を見るまゝにまかせた。

母は涙ぐんで變な聲を出した。

此頃は自分も自分が信じられなかつた。

七三

だが自分は心配するなと思つた。  
今この會つて居る喜びで澤山だ。  
何と云ふ輝やかしい面會だ。恐ろしい對面だ。  
妻子が留守で俺が夕飯をあつらへて來た。  
母があつらへに行かうと云つたのを止めた。  
あつらへに行つても氣が氣でなかつた。  
とんで歸ると母は坐つてゐられないで立上つて玄關に待つて居た。  
久しぶりで二人は向ひ會つて食べた。  
喉にはとても通ら無い、少し食つては止める  
涙に霞んで茶碗が見えなくなる。  
母の話の聞けば一々涙ぐむ。  
人知れぬ苦勞の話を自分は只口も利けないほど亢奮して聞いた。  
口よりも涙が先きになつた。  
何でもはいく／＼察して聞いた。

察するに餘る苦勞の數々を  
然うして又助け手の無い中で多くの他人が母に對していかに  
深切を盡してくれたかを。  
どこへ行つても母は助けられた。  
飛んで行つても御慰めしたいと云ふ人や  
黙つて多くの金を貸してくれた人や  
あらゆる深切の申し出をしてくれた人の多いのに、  
母は感謝した。自分も感謝した。  
母は云ひたい事を残らず話した。  
さうして子供に會へなかつたのを残念がり  
雨降りの中を妹の家へ歸つた。  
停車場で二人は口に出さないが  
別れるのが辛かつた。苦しかつた。  
一緒にその儘抱き合つて死に度い位



一人で家へ歸つて來れば

もう自分には用がなくなつて仕舞つた様だ。

妻子は田舎へ行つて留守だ。

見廻せば室の中はどこからどこまで形附けられてゐる

戸棚の中も綺麗になつてゐる。

母が自分の歸りを待つて居る間にすつかり掃除をしてくれたのだ。

母の置手紙を読めば又も母に會ひたくなる

心臓がドキ／＼躍り、不安でたまら無い。

若しも會へずに歸つたらどんなに二人はつまらなかつたらう

母の置手紙は何から何まで云はうとして矢張り會つて行きたいので、手紙を長びかしてゐる。

となりの時計が七時を打ちました、等とかいてある。

幾度も歸らうと決心してぐづ／＼してゐたらしい。

あゝ會へたのは感謝である。

父の家のほとりを通つて

小學校の庭で遊んでゐる子供を見て

電車の中で泣き出して困つたともかいてある

自分は頭がはち切れるほど泣いた。

もう一度母に會ひたい

母と一緒にいつまでも黙つてゐたい。

机の上には小さな金包みがおいてある

母の名前と金參圓とかいてある

それを見れば又涙が湧いて來る

恐ろしい一夜だ。氣が狂ひ相だ

心氣亢奮して云ふに云はれない苦しさを

外ではのろ臭い雨が降つてゐる。

もう一度、母に會ひたい、もう一度母が見たい

妻子よ明日は是非歸つてくれ

僕は一人でゐる夜が恐ろしい

この輝やかなしい夜が恐ろしい

幾度も床へ入つては飛び起きた。

考へ出すとすぐ苦るしくなる

臺所から金盥を持つて來て

頭と云はず胸と云はず水をかけて冷やした

體は亢奮し切つてブル／＼ふるへてゐた。

母の置手紙と、金包みと、子供のごむまりとを枕頭に置いて

それをぢつと見乍ら心を安めようとした。

幾度も醫者へかけつけようかと思つた

隣りの人を起さうかとも思つた

妻子にも遺言を書かうかとも思つた。

室に眠れないで玄關へ寝た。

インキをとりて室へ行くのが恐かつた。

手足がひきつた。

自分は滅茶々に思ひ亂れて眠りに陥ちた

十三時間一氣に眠つた。

何も思ひ出さない眠りを貪つた。

翌晩は又淋しくなつた。

妻子は歸つて來ない。

氣が狂はしいほど塞るので外へ出かけやうと仕度してゐると

妻の父が山の仕事場から遣つて來た。

子供に菓子、俺に刻み煙草と、魚を買つて

氣持が塞いでたまら無いので急に思ひ起つて來たと云ふ。

自分は助かつた。

父の好物の酒をあつらへて二人で靜かに話す内

自分も妻の父も氣分がすっかりよくなつた。

七十になる父は一合の酒にいゝ氣持になつて床へ入るとすぐ眠つた。

自分は妻へ電報を打つて来た。  
明日は歸つて来るだらう。  
自分は落着いて母へ禮手紙をかいた。  
すつかりあの晩の事を白状してやつた。  
あれから涼しいいゝ日がつづく  
思ひ出すと涙ぐむ。

### 御母さん

御母さん

あなたを見ると少年のやうに見えます  
何故でせう

あなたはもう五十を越してゐらつしやるのに  
そんな筈は無いと思つていつも見直しますか  
如何うしてもあなたは少年に見えます  
せいふく十五六です

あなたを見てゐると笑はずにはゐられません  
あなたの行動を見てゐると可笑しくなります  
あなたはまるで悪の智識を知らないのですね。  
その性でせうか。  
あなたを抱き上げたらどんなに軽いでせう。

御母さん

あなたを見てゐると笑はずにはゐられません  
涙ぐまずにはゐられません

不思議な御母さん

あなたを軽蔑する人はあなたに感心してゐるのです。

あなたをきつと羨やましく思ひます

誰でもあなたを見ると知らず／＼微笑を浮べてゐます。

不思議な御母さん

あなたの力は絶大です

然しあなたは御自分を傑い人間とも、善い人とも、美くしい方とも思つてゐらつしや  
ら無い

あなたには何でも當り前なのです、

だがあなたは勇敢に思へます

誰でも駄目な時——非常に悲しい場合とか出過ぎると思はれる場合

躊躇したりまごついてしまふ時、

どん／＼踏み越えて行動なさるのはあなたです

あなたは全く悪と云ふものが解らないのです、

如何してでせう

境遇もあなたをどうする事も出来無い

あなたにあつては何にもかなひません

あなたの信念は全く強いものです、

神が宿つて御いでにやうに。

## 平和よ

八四

平和よ、平和よ、來れ、それは自然だ。こだはつてこだはつた俺の心よ、休まれ、今日こそは休まれ、かの敵は自分の所へ來た。和解、何と云ふ喜びだ、むしろ俺が恥づかしい思をした。俺は祈る。どうか彼の上に幸福あれ、本當に御互に淋しいのだ。この上疑つたら俺の恥ぢだ。俺よりも年とれる彼よ、休まれ。安らかなれ、自分の疑ひを許してくれ。凡ての恐怖。不安、疑懼の去つた時、人は泣かずにはゐられ無い。汝に悪意の無い事を知つた自分はどれ程後悔してゐるのだらう。疑ひよ、汝位いま／＼しいものは無い。だが今日は嬉しい、喜びよ、喜びよ、かたくな／＼わが心を笑へ。それにしても戦争は早く終へよ。平和のしるしが見える時は喜びだ。

平和、平和、家庭においても、社會に於ても、國家と國家の間に於いても平和であれ。永くつゞく平和よ來れ。飽きる程長い平和よ來れ、平和のみ自然だ。平和の喜びを少しでも知つた自分は凡ての平和を願はずにはゐられ無い。永い間の雨降りが止んで雲の切れ目が見えてそこから青空が見えるのは嬉しい。その喜びは誰でも知つてゐる。

平和を愛さない人間は無い、平和を知らない人間も無い自分も實に小さい平和の喜びを知る。壓抑されて居た心が喜び勇むのを知る。どうか再び自分の心に嵐の雲の蟠ら無いやうに。然うして大きな平和を知り感じ喜べるやうに。

## 或る日

八六

降つた、降つた

昨夜は夜通し騒がしく

幾度目を覺ましても止むどころでなく

これでは明日の日曜は駄目になるだらうと

寝飽きる程寝て起きて見ると

嬉しや、急に日が照り出して

出る。出る、家に残つて居る人があるのかと思ふ程

どこの往來も人で押し合ひだ。

昨夜の雨で押し流されて來たやうに

櫻の花の斑らに散つた汚ない地面にはねてゐる。

空も斑らだ。あつち、こつちに雲の塊りが出來て居る

日に照らされて約束が違ふぞと不平顔だ。

だがそんな事に頓着なく地面はどんく乾いてゆく  
皆んな吸ひ上げてしまふ。

その中で急ごしらへの生れたての蝶々が

未だ出來上らないのだとうしろから

捕へられるのを恐がるやうに

大急ぎで恐いやら嬉しいやらで水蒸氣に足をとられ乍ら先へ先へととんで行く  
生れた許りの喜びに興奮し切つて。

八七

## 彼は歩めり

彼は歩めり

人の世に深き生命を知らず爲め

古墳を出で、静々と

歩み給へり、影の如

もの静かなる平和の春よ

花は散れども青葉で飾り

彼の歩みは尙去らず

幾多の人を召し連れて

更け行く春を彼は歩めり。

深き生命に導かんと。

## シヤバンヌの繪の寫眞をもらつて

今日H君からシヤバンヌの實にいゝ繪を貰つた。

壁畫のデテールだ。

中央に何かに憤つた労働者の父が肱を張つて怒つて立つてゐる

それを左右から妻と少年がとどめてゐる。

三人が實に一致して居る

精神がこもり切つて居る

見てゐると涙ぐむ

何と云ふ崇高な藝術なのだらう

有難い、實に有難い。

あの怒れる父の顔の尊さ、その眼の偉なる光り

肩に高々と擔いだ大きな瓶、

その前に父の衣服にとりすがつて父の顔を上向いてなだめ乍らとめてゐる少年の輝く

やうな美しい肉體！

何か云ひ乍ら折り曲げた肱を片手で抑へて片手をあげてゐる母の姿

實にこの労働者の家族の神聖な愛が溢れてゐる。

崇高無類の繪だ。生ける宛らの繪だ。

それを見る度びに自分は感奮する。襟を正す。

何と云ふいゝ繪を貰つたのだらう

且君に感謝する、すまない氣がする

然しもらつてよかつたと思ふ

何かととりかへこしてもいゝと思ふ

實に有難い、實に有難い、

見れば見る程力が生れて來る

實に恐ろしい繪だ。

勿體無い氣がする位尊い美しい繪だ。

拜み度くなるやうな繪だ。

三人の舉動が實に一致して涙ぐましい  
生々しい肉附だ。この神祕的な力！



## 夕 暮

九二

日が暮れて凡てのものが遠くなつた。  
人里遠く戀しくなつた。

自分は廣い島の中を家路へ急いで歩いた。  
地上はもう薄闇に包まれて遠くの方には霧が罩め  
遠く退いた空のみ異様に闇と對照して光つた。

麥畑の地平に遠い國の山々が姿を現はした。

日はそのうしろに沈んだので

動かない光りがその前後にある

一二片のちぎれ雲が實に靜かに山の肩にとんでゐる。

その靜心ない姿は遠き神々の思ひがする

その雲を眺め、遠くの方からだん／＼霧の這つて來る地上を眺めると胸がせまつた。  
夕暮の空氣は力に満ちて緊張した。

盛んな夜と晝との交代が

自分の脈管の中にもどつと流れて來た。

麥島は青さめて烈しく身ぶるひした。

島の中のたつた一軒の小さい百姓家も

遠い地平の山々と少しも不調和で無い位對照して

金のやうな澄んだ燈をともした。

あゝこの調和、天と地との合體！

夕靄はだん／＼遠くから這つて音も無く流れて來る

小さい百姓家の周りにも流れて來るのが見える。

自分は興奮して急いだ。

懐しい家路へ、燈へ、永い夜の仕事へ

願れば日の光りはすでにかすれ消えて

雲の影も山も隠れた。

只靄の中に澄んだ燈と

九三

星がチロチロあつちこつちの空で光り出した。  
自分は湧き立つ人波と燈火の都會へ入つた。

### 憐れな眼

自分は今日も見た。  
人通りの稀な町の裏通りで憐れな眼をもつた女を  
何か云ひかけられた様に小犬のやうに媚びておどろいた  
惨酷な運命を忍ばせる様な憐れな眼だ。  
あゝそれは深いところから堪へやらずに人を見る片眼だ。  
男の胸に浸み付くやうな魔力ある零落した美しい女の眼だ。  
男に對する不信用と恐怖におどろいて媚びてゐる眼だ  
無意識にすり減つた軀の影から  
隠す事も、抑へる事も出来ず  
惨酷な運命を裏切つて笑つてゐる眼だ。

## 子供の時

九六

自分は病氣の時側に母について居て貰つた  
子供の時の喜びを忘れ無い  
側について居て貰ふので

暖い母の愛を思ふ様吸ひ乍ら  
安心して寝る幸福。

御母さんの爲る事を伏目で見乍ら

此の自分の味つて居る幸福を破つて

御母さんが急に立ち上りはしまいかと

ない／＼心配して居る幸福。

未だ眠ら無いのですかと云はれて

濟まない様な氣のする、利己的な子供の幸福

あゝこんな幸福な時間を自分はもう稀にしか持て無い

然し自分はこの幸福を忘れぬ。

## 涼 夜

今夜は空は高くて暗いけれど  
涼しい晩だ。

風が静かに木立に寄せては  
撫でゝ居る音が吹いては消える。  
時々露が落ちる大きな音がする。

町の方では自働車の笛が水の中で鳴る様にポンポンとする  
空気が深いのだ。

室の中には電気が明るくともつてゐる  
室の中を立つて歩いて

空の高いことが意識されて居る。

星の一杯澄んで居る高い空の下で  
かうして動いて居ると云ふ感じが

自分の心を静かに抑へて居る。

涼しさに堪へないやうに

近所の牛屋の牛が高く啼いて

末の方を永く引張つて弱らしてゆく。

静かだが妙に騒しい晩だ。

暗に紛れてガ、ガと鳥が低く飛んでゆく

すてきに小さく聞えるのは

高いところを飛んでゐる奴だ。

暗いけれど妙に明るい晩だ。

風は絶え間なく木立に寄せては撫でゝ居る。

こんな晩に火に觸れた様に焦げた青葉が澤山地に落ちる。

## いなの子

淋しくなると川のほとりへ行つた  
夕潮が満ちて来ると  
未だ食べる事も知ら無い生れたてのいなの子が  
岸に群れて来て  
蛇の巢をひつくりかへした様に  
銀色にもつれ、溢れて  
勢よく走り廻つた。  
大騒ぎをやつた。  
空には一寸と出てすぐ隠れる  
二日餘りの月が出て居た。

## 漁師町

夕日が山の方へ傾いて  
海の上が蔭つて来ると  
帆をあげて小さな漁船が  
無數に沖を目がけて走り出す。  
その賑やかさ、海の上が一杯になる  
あとから、あとから走つてゆく  
その早いこと、矢のやうだ。  
岸にある舟は皆んな出切つてしまふ。  
然うして村は子供と女と老人許りになる。  
静かになる。  
沖の方では灯がチラ／＼無數に見える。  
夜中になると沖の方から

エン、エンと掛聲が聞えて来る  
あとから、あとから歸つて来る

エン、エンと云ふ人間の聲は

夜の中に疲れ切つて

力を出しても出しても抜けてしまふ様に

岸近く来ると待ち兼ねて居る様に急に黙つて消えてしまふ。

あとから、あとから

エン、エンと初め聞え出したあたりから遣つて来る。

五人位一組の聲が

無數にエン、エンとやつて来る。

岸にはカンテラがともり

人のそぼろな姿がいそがし相に往來し

反響のない聲がとびかひ

板子を洗ふ音や勇しい女の聲がする

頭の上には

深い空氣に包まれて無數の星が

グラ／＼光る。

小さな漁師町の夜中の賑やかさ、氣味悪さ。

## 鶏

108

朝

鶏が一羽啼いた

愛の溢れた可愛ゆい聲である。

起き上つて羽をばた／＼させて

全身を持つて力限り啼く小さな姿も眼に浮ぶ

孤獨な力のこもつた華やかな聲だ。

一度啼くと黙つてしまつた

自分は魂で聴く事が出来たのを喜んだ。

それは此世以上の國からの聲だ。

隠れたる祕密の樂園に棲んで啼く聲だ。

## 破れた顔

自分の家に

妻の兄の忘れ形見の十一になる女の兒が来てゐる。

いつも黙つて居て言葉もなかく出さない。

耳も遠い。強情な位

だが稀に口を聞くと實に音樂のやうだ。

耳も遠い筈だと思ふ。

何か話しかけると只いきなり笑ふ

顔がどこからどこまで裂けてしまつた様な

破れた顔を見せる。

實に美しい。勿體ない。

こんな少女が

どんなに澤山世の中にあるだらう。

109

全く心許りだ。

然うして心に届か無い事には

まるで耳を持つて居無い聾だ。

愛のみ深い心呼びさまさせるのだ。

### 隠れたる者

隠れたる者がある。

人々の眼から隠れた者がある。

此世以上の國がある。

おう樂園がある。

其處にあるものは凡て美しい。

そこにある諸々の生物は皆んな美しい

馬も獣も草も木も不思議な生命を有つてゐる。

其處は不滅、不死の國である。

おう吾々はその樂園の主人である。

その樂園は隠れてゐる。

けれどもその秘密の國には誰にでも入れる。

見たり、聞く事が出来る人には自由自在に入れる。



## 夜の町にて

104

夜になると

呉服屋の店先に

女が澤山集つて来る。

燈火に集る魚の様に

ぶら下つたメリンスの布に

ちよい／＼と手を觸れて

食ひちがふ様に引張つて見て居る。

彼方でも此方でもやつて居る。

こけらのとれた様な汚ないなりをした

いろ／＼の衰れた女が

子供に買つて遣りたいのか

もの欲し相に

電燈の一杯ついた明るい店先で  
綺麗な色の布と布の間を  
恥ぢも見榮も無くうろついて  
ぶら下つた布を引張つてゐる。

104

## 朝

110

朝未だ日は出ないがもう室の中は暑い。

外では雀が澤山落ち着か無い騒ぎ。

喉を洗ふやうな鶴の聲

餘り早く起きて啼いて許りゐたので睡けのある疲れた鶏の聲  
わが家らしく啼く鴉の寝ぼけ聲

時計の夜をいそいだる相な振子の音。

夜の去つたのを恥ぢる如く主人の出る戸口に來てふるへつゝ欠伸を噛み殺して啼く犬の聲

戸の隙間から投げ出しゆく新聞の音

みそをする手馴れた音、上板をはがす音、

とやの開くの待つて押し合ひつゝ竹垣を引かく鶏のコツコツと云ふ聲  
戸が開かれて外へ出た喧騒、

とやを出て落ち着いた姿勢でゆつくりしてゐる雄鶏、

もう喧嘩を初めた鶏の聲、逃げて行く聲

不健康らしい弱い胸を思はせる人間の咳、欠伸、戸を開けば眼が舞ふやう

露けき朝の臉の重さ

未だ睡つてゐる大地、露に倒れた草、

薄い霧に包まれて木々の優しい眠つた姿

その上の空、神祕を包む雲、動きがつかぬので少しづつ押し合つて動く雲の合間々々のうすい明り、とんでゆく五位鷺、

室の中の汚なさ、むし暑さ

鼻を這つてゐる小さな蜘蛛

はれぼつたい顔をして寝巻姿の儘母の大きな下駄を引すつて門前へ出てボンヤリ考へてゐる子供。

顔から一杯水晶の汗を垂らして通る夜勤がへりの洋服の男の顔の太陽のやうな美しくさ

往來に出て戸を開けてゐる兩側の店と店とで道をへだてゝする挨拶、  
未だ戸を開けない家が多い雨戸のつらなり  
消えずにゐる瓦斯燈のしをらしい美しくしさ  
大道の最中に寝そべつてゐる横着な大きな犬  
黙つて通る勤めの身  
どぶ板の上をわざ／＼通つてゆく少年の職工  
かけて来てとまると、ばたんと戸を開いて牛乳瓶をつかみ出した路次へ入つてゆく白  
シャツの男  
靄の深さしつとりした道路、

## 落日

太陽が落ちて来る。  
高いところから凱旋して来る。  
活潑に赤く熟して流石に疲れて  
何も無い空をなみ／＼と光輝で満たして引返して来る。  
町の喧騒は一段と活氣を増して賑ひ  
音も無く落ちて来た太陽の安全に地につくの喝采し、讚嘆する様に湧き起り  
安堵の吐息の如く  
涼しい夕風と共に物皆聲を生じ  
青葉の枝はそよぎ  
雀は集つて来てその間に囀り交し  
群集環視の只中を  
喧騒の聲をよそにして

太陽は靜かに館へ入つて行く。

## 嵐

日中の嵐

奇異な大木の警め合ふきしり

幹の運動。

太陽が雲を出た。

その大きな平和

嵐が止む

しんかんとした日なたで一羽の小鳥が前の騒ぎとは無關係で啼く。

助つたやうな氣持。

## 若葉

一一六

若葉の中で雀が澤山ないてゐる  
その聲の若々しさ  
嘴の千切れるやうな聲  
腸を洗ふやうな聲  
啼き乍ら飛んでゐる  
その運動と聲のすばらしい力

## 夜の人々

夜の電車は走る。  
茫々たる暗夜の中を  
そのきしり、轟き  
響きかへる夢、  
こゝにばかり世界中の光りを集めたやうな  
室内の破裂し相な輝き  
その中に居並ぶ人々の靈妙な姿  
あつち、こつちに光る眼  
海底の洞窟の間から輝くやうな黙つた人間の軀からたど二つあつち、こつちに光る眼。  
眠らない大きな正直相な眼の輝き、  
疲れた頭から輝く恐ろしい眼、  
氣味悪いまで透き通つた皮膚の青白さ

一一七

自分の下りる處を通り越すのを恐れる如く

幾度も硝子窓から外を覗いて見る女のおびえた瞳

あゝ夜の世界の一端に集つた人々の氣味悪い慕しさ

大なる家族を暗示するこれら一團の夜の人々の恐ろしい輝き

粗悪と醜い肉體のどこからか

贅澤な靈妙な光りが射して

すたく／＼に人間の要素を放射してゐる悲惨

極端に醜いものと極端に美しいものゝ一團。

その頭の上で遙かに高く更けて行く空の感じ

茫々たる夢。とりかへしのつかない悲嘆！

その健康と疲勞、眠りたる者、眠らざる者、

満足なものと心配な顔々。

あゝ夜の電車の中に休息する人々の怪しい夢

太陽の光りを盗んで走るこれ等一團の山賊のやうな恐ろしい人々の悔いたる眼！

その肉體から唸り出す

いびきと吐息、くり言、懺悔、

それ等のものを掻き消して轟々と電車は走る。

滅茶々に空の下を走る。

急に心細くなつたやうに走る。

その響きのまきかへす果ての空の淋しさ。

## 散 歩

天から降るすばらしい夜氣の  
静かさと涼しい輝きの中に  
家を忘れて眠らないで歩く都會の人々、  
その呼吸する顔々に現はれた安らかな平和  
放縦な思ひ切つて安泰な姿

## 若 葉

若葉をつけた木のうしろの  
塵一つない淺黄空、  
生れ立ての子供を見に来る親のやうに  
麗しい空は若葉を圍んで  
讚嘆しつゝ共に光り輝く  
微妙な調和

## 調和

三三

調和したものは守護を受ける、  
その自然の守護は光榮だ。  
不調和のものは壊される。  
人の心を通す時の流れに。

○

俺が考へに沈んで、  
如何うしようもなく道端にうろついてゐる時、  
誰でもいゝ側を元氣な人が通つてゆく。  
忽ち俺はその人と並んで歩き出す。  
あとへついてゆく。  
いつの間にかその人の姿が掻き消えてしまつても  
俺は矢張り歩いてゆく。

○

俺が一人でつむじ風のやうに入つてゆくと  
電車の中の人が皆んな俺を見た。  
皆んな同じやうに黙つて  
さながら俺の顔から何か期待してゐる様に  
何かもらひた相にふりむいて見た。  
俺はその眼を見て悲しくなつた。  
おとなしい人達だと思つた。

空地にて

白鷺が空で迷つてゐる  
太陽が矢を射てゐる。

同じく

雲も無い、何も無い空に  
燕が水中の魚のやうに勢をつけて高くとんで消える。

三三



若葉の枝が皆んな動いてゐる

澤山の若葉は皆んなヒラ／＼風に舞ふ  
よじれた皺のある大きな衣のやうだ。  
この衣が舞ふには風が足りない。

同じく

俺は空地の日和に出て

林の中でギーギー啼く鳥の聲を聞いてゐる  
地に下りたり木の中に隠れたり  
勝手氣儘に馴切つて遊んでゐる  
勢のいゝ雀の聲を聞いてゐる  
地面には鐵の鎧を着た蟻が這つてゐる  
彼處でも此處でも一匹づゝ  
涼しく活動してゐる  
大きな餌を啣へてぐん／＼引張つてゆく巡查のやうな奴がある。

ぢぢいじみた毛蟲が這つてゐる、  
皮を着たとかけが穴の上に坐つてゐる。  
蠅の羽のやうな紫蘇の芽がかたまつてゐる  
澤山の小草は皆均しく美しく  
均しく青い。

この庭をとり圍んだ木々の若葉は皆んな  
旗のやうに垂れてゐる。  
風がこの空地をめがけて空から落ちて來ると  
若葉は大きくひろがつて  
一齊に大きな旗を空へ向つて樹てる。

## 月

月の前の雲は動か無い。  
行列がとまつた様に動か無い。  
凍えた様に動かない。  
幻燈を逆さに映じた様に動か無い。  
雲は綱を張つた様だ。  
月がその中で動か無い。  
自分の心も動か無い。

## 蠅

ゴミ屋がゴミの山の車を曳いて行く。  
ゴミ屋の女房は後押しで  
男の様に絆纏に股引、草鞋ばき。  
然し流石に女だ。髪は手拭で包んで居る。  
けれども疲れて車を離れ、大きな溜息をふうと吐き。  
汗の流れる顔を拭ふと手拭をとると雲霞のやうに蠅が飛ぶ。  
俺は見て居て怒りが發した。  
死體にたかる蠅位憎いものは無い。  
然しゴミ屋は蠅位平気で、車のあとを追つて行く。  
蠅もあくまであとを追つて行く。  
乞食をからかふ子供の様に雲霞の如く唸つて追つてゆく。  
あゝ云ふ人が天國へ行くのだ。

例へ俺達は地獄へ行つても。

### 小さい笑ひ

赤ん坊の頬にくぼみが出来る  
針でつゝいたより小さい笑ひが  
一番遠い星よりもつと小さい笑ひが  
浮んでは消える。  
小さな喜びの火がともつては消えるやうだ。  
誰か側からつゝいて笑はして居るやうだ。

## 蜜柑と子供と余

子供が蜜柑を持った来た

その一つを余にくれ

一つを自分でむいてゐる。

自分と子供とは火鉢をへだて、差し向ひ合つて黙つてゐた。

自分は自分の手の上の蜜柑を見た

餘りに美しいのに自分は驚いた。

あやしき許り美しい

どこへ置いても美しい

机の上に置いて見たり、掌へのせて見る。

どこへおいても自分と連絡がある

見え無い枝から今もぎとつた様に美しい

光つたり消えてなくなる

燈光はこの深い闇にはまるで不完全で子供だましにすぎない。

自分は子供の動作をそつとぬすみ見た

彼は下を向いて黙つて蜜柑をむいてゐた

ぶきつちよな手附である。

自分は彼の懐から半分顔を出してゐる蜜柑を見た。手品の種を見つけた様だ

いくつものつてゐるなと思つた。

## 雀

二三

雀等は喜び歌つてゐる  
雀等は木の頂きに群れ集ひ  
一度に洞穴から火の燃える様な羽音で  
地を襲ひ掠めつゝ歌つてゐる。  
彼等は地の充實したのを祝つてゐる。  
彼等の喜びの歌は天にまで達する様だ  
日毎雀等の數は殖え元氣づいてうたふ  
太陽が地に近づき、草が萌え出し  
種の地に満ちるのを歌つてゐる  
見よ、彼等は太陽が雲を現はれる度びに奔めき大騒ぎをやる。  
彼等は木や屋根を離れて空中へ一團となつて飛んでゆく  
一羽一羽が同じ姿勢をして

濃くなつたり、消え入る様に薄くなつたり  
開いたりつぼんだりする  
一度に羽音を聞えなくしたり  
一齊に火の燃えついた様に響かしたり  
雀等は地の上を踊り狂ひ  
その喜びの歌は天にまで響いてゐる。

二三

夕 暮

一三四

夕暮の空は風いだ  
静に過ぎた痕が残つてゐる  
恐ろしい大きな重いものが通り過ぎた様に  
熱した空気が疲れて静かに濺んで居る。

夕暮の空は風いでゐる  
波は畏るゝ様に音をひそめ  
雲は走る事を止めて横はり  
何かの命令に従つた様に  
沈黙は野山に満ちてゐる。  
オ、平和なる一日の死よ  
自分は今日一日何處にゐて何としてゐた

自分の心は恥ぢて苦しんだ。  
だが尙明日の日のある事を知らせる様に  
遠い空に星が幽かに光り出す  
自分は地上に立つて、  
實に遠い星の方へ向つて涙ぐんだ。

一三五

## 朝の喜び

一三六

朝風に吹かれて町を歩いた。  
地球は暖い夜をぐつすと貪つた眠りから  
やつと目が覺めて冷たい空気を快く呼吸して居た。  
どこにも新しい日の夜離れする變化が見えて居た。  
寒さうに亂れて動き初めた白い雲にも、消えてゆく地上の靄にも  
浮島のやうな未だ眠りからすつかり覺め切ら無い樹々の姿にも  
美くしい一日の憧憬がだん／＼強くなる日の光りの中に見えてゐた  
宛ら子供の視力が定つて來るやうに  
未だ整はないものは之から整はうとして居た。  
包まれたものはその蔽ひののぞかれるのを待つてゐた。  
自分は失つた國を敵からとり返へした様な氣がした  
一夜の眠りに凡ての悩みは恢復され

昨夜の涙は今朝は却つて快いものとなつてゐた。  
自分は新しい一日と共に新しい希望が湧くのを感じた。  
行き交ふ人々も、何處から來たのか、何處に住むでゐるのか、自分の眼中にはなかつた。  
誰でも齊しくこの地球の上の主の様な氣がした。

一三七

## 朝

一三八

夜が明けた。

木も地面も家々の屋根も眞白に息をついてゐる

形を成さ無い大きなとろけた太陽が

動か無い木々のうしろから顯はれる。

桃色になつたり、白銀に變つたり、蔷薇色の火焰を吐いたり

音も無く廻轉し乍ら燃えてゐる。

油然とした力が漲つて居る。

偉大な爛熟した崇高な創造の力が樂々と湧いてゐる。

一夜の中に魔術をかけられた様に

立つた儘凍えて動か無くなつた壯麗な大地は思ひがけ無い暖い氣息に生き返つて喜んで居る。

霜氣を含んだ未だ憂鬱の散ら無い凄い空も

鹽の残つた様な結晶した木も屋根も

白い苔の生えた地面も魔術を溶れて消えてゆく

地面は波打際の様になつたと靜かに濡れて行く

どこの屋根からも湯が沸いた様な小さな煙がトロ／＼と飄り

白いギザ／＼した木はうすくらしい霜氣を帯びた空氣の中から輝き

景色はブル／＼震へてゐる。

晴れやかな輝やかしい微笑と喜びが

凍えた死の面をさゞ波の様に廻らして行く。

雀は勢よく囀り、子供は白い息が口から出るのを喜んでゐる。

空は見る／＼内に青々として廣大な光りの世界が、

どこから湧いたのか出現する。



## 乳離れ

子供に乳離れをさせようとしたら子供はそれから毎日外へも行ききたがらない。母の側へ許り行ききたがる。

一人で隣りへ遊びに行つても「御上りなさい」と呼びかけられるといそいで母のところへ思ひ出して逃げ歸つて来る。

可愛相におちく遊んで居られ無い。別れるのが辛く、戀しいのだ。

腹が減る性許りでは無いらしい

どこかへ行かれると思ふのだ。

子供は未だ母の存在を聲の音色や乳で知つてゐるのだ。

無形のものとして知つてゐるのだ。

子供には母はどんなに大きなものに見えるだらう。

母は吾々が見る宇宙の様に大きく不思議なものに見えるのだらう。

## 風

深夜に風が吹いて来る。初めは静かにもうさうにだるく吹いて来る。

然うして木々にぶつかつてすつと消えてしまふ。

すぐ跡から又静かに吹き起つて来る。今度は少し強い。

先刻吹き消えた風が未だ消えずにそらに残つてゐて仲間に加つて轟うと吹く

木が驚いてバサ／＼する、落葉が地面を駆け廻る

その音がしんとした底で消え無い内に、又遠くから次の風がやつて来る

今度は先きに來た二つの風が待つてゐて一層大きな音を立てる

それからばつたり静かになる。

もう止めかなと思ふと又遠く遠くの方から吹き起つて來るのが聞える。今度は届いて

見ると一層強い

がそれも消えてしまふ

と又遠くから一層強いのがやつて來る

その音が未だすつかり消え無い内に、もう次に來るのが音を立て、追ひかけて來る  
その音が未だ到達しない内にもう又あとから來るのが聞えて來る  
然うして次から次と、遠く遠くの方から風は吹き起つて來る。

波の様に果て知らぬところから湧き出して來る

だん／＼間隔が近くなる。自由に強く幅が出来力量が加つて來る

豪壯などこまで吹くか知れ無いぞと云ふ氣がして來る

遠くの方からいくつもいくつうねりも吹き起つて來るのが先へ先へとはつきり聞えて來る

時々右からも左からも至る方面から吹いて來る風が宙を横切る

だん／＼複雑なハーモニーが生れて來る

驚く可き底力のある力が生れて來る

いくらでも湧いて來る

ワグネルの音樂の様に

波許りどん／＼やつて來る。押し寄せて來る。ぶつかつて來る。

一つの大きなうねりが消え無い内にもうそれに頓着なく、又一つのうねりが後から生れて來る

然うしていくつもいくつもの大きなうねりを押し出して來る。

巨人がどこかに隠れてゐてその手で押してゐる様に小さな家等今に飛ばされてしまひ

相にぐん／＼やつて來る

先きの先きから、だん／＼深いところから、遠いところから生れて來る

先の先があり奥の奥がある

ごう／＼ともう全世界は音響の世界となつてしまふ

その音の中を新しい更に深い奴が美しくしい音色で完全に生れて來る

曉方まで風はあばれてゐる。湧き立つてゐる。手のつけられ無いものとなる。

然うして荒れ狂つてしまふと翌日はしんとしてゐる

日が美しく夢の様に照つて眠つてゐる。

## 眞夜中

一四四

冬の夜、四邊りがしづまつて

十二時一時となると

自分の胸は全く落着いて漸く興奮にとりつかれて来る  
何ものか私の内に目覺めて来る。

外では彼處此處で犬が急に忙し無く呼び初める

水中から現はれた不思議の聲の様に

そのよく響く聲は

實に忙し無くあとからあとから湧き出して

地平線から合圖の合つた様に毎晩時を定めて啼き初める

その聲は寂しく喜びが溢れて来る。

暫らくすると消えてしまふ。

不思議に近い氣持がする、

自分の生きてゐる事が今更に感じられ

妙に氣がせいと来る。心が燃えて来る。胸の中で獨言を幾度もくりかへす

その時を逃がしたら自分は何も書けなくなる

感興の湧いて来るのはその眞夜中だ。

何でも出来る様な氣がして来る

かゝる時を自分はいつも待つてゐる

若者が寢鎮つた家を抜け出して

戀人のところへ急ぐ様に

千載一遇の機會である。

オ、かゝる夜更けて一人目覺めて

何かするのは感じがある。

生きてると云ふ氣がする

一四五

## 小景

一四六

立派な午後となつた。  
太陽はもう大ぶ遠くへ歩いて行つた  
大地の先きへ歩み出した。しかし今一層宇宙は明るく光りに満ちて居る。  
今が絶頂の様に  
しんとして空気がまるで動か無い  
人がゾロ／＼賑やかに通つてゐる。

## 影

明るい日がさしてゐる  
女の髪の毛の様な纏れた影が  
日の光りの中に映つてゐる。

一四七

## 草の葉

一四八

八歳位の女の子が二歳位の子供をおんぶして歩いてゐた。  
背の子供は握り拳の中に  
塵の様な草の葉をもつて  
それをいつまでもいつまでも眺めてゐた  
オ、その顔の神々しい憂愁

## 倦まざる力

山よ、河よ、平野よ

汝の内にどんな美しくしい力がひそんで居るのか

自分は毎日汝と共に有つて飽き無い

汝の美を見飽かない

自分は思ふ、汝の内には倦まざる力がひそんで居るのだ。

何万年を通して倦まない偉大な力のある爲めだ

一四九

## 母の愛

母は年老いた。自分ももう子供では無い  
けれども今尙昔の母だ。自分も昔の子供だ  
年月は自分達をへだてる事は出来ない  
自分が生れてから今日まで  
母の愛は一厘でもへら無い  
恐らく永遠に減りも、倦みもしまし  
オ、偉大なる母の愛よ

## 富士

富士は汽車の窓のすぐ側に居た。  
透き通つた翅を休めて居る  
巨きな鳥の様に、  
俺は覗いて見た。  
富士は大きなはつきりしない、褐色の眼球の様に  
生きて居た。  
俺は恐かつた。今思つても。

## 聖なる夕

日が暮れると、まるで冥界を見る様だ。

河からは霧が立ち昇り

澄み切つた空に

山々の黒い脊が

高く低く遠近に浮ぶ。

宛ら天使が集へる如うだ

ギザ／＼に尖つた連山はひろげたり、疊んだ翅の様、  
夜になると羽搏きはしないかと思ふ

## 夕の太陽

太陽はどこへ隠れるのだらう

夕方になるとよその人のやうで無く

緑の丘の上に居る。

會ひに行けば譯なさうだ。

ブレイキは會つて話した相だ。

## 充 實

一五四

自分の居る處はどこでも充實して居る

自分は何處にも空虚を見無い

この世に空虚のところはどこにも無い

都會は充實してゐる。田舎も亦充實して居る

自分は一人山又山の中を歩いた。

人通りの全く無い淋しい道も、都會の最も繁華な道と均しく充實して居た。

道の前後左右は樹木に囲まれ、谷の中も埋める様な樹木だ。

樹木は皆小枝を満たしてゐた。女の髪の中の無数の長いびんの様に

道に溢れる静寂は宮殿の内を歩くやうであつた。

山、立派な樹木と鳥類に富んだ山はいかなる宮殿にも劣らない。

それは切尖鋭い塔をもつ自然の寺院だ。最も崇麗の祈りの場處だ。

又山はいかなる犯罪者も匿まふ。樹木は逃れる者を勞はり隠す、獸は獵師の銃尖を樹

木に隠す

オ、いかなる場所も自分の歩む處、充實して居無い處は無い。

停車場の澤山の大きな室も充實して居る。すぐ空になるが、忽ち一杯となる。旅館も

公園も劇場も會堂も皆充實して居る。空中に釣られた大きな鐵橋の上も、暮色と煤煙

に包まれた都會も、河口も、港も、

兄弟姉妹の在る處いづくも自然に劣らず充實してゐる

緑の草むらから咲き出る花のやうな子供や緑の茂みから歌ひ出る鶯のやうな清い聲を

もつ處女や無数の大なる男女に満ちてゐる。

水の中も又充實してゐる。渦巻くところに魚は湧き、流れるところには這ふ様に水底

を進む無数の魚の群を見る

流れについて登つたり、流されて下つてゆく

オ、如何んな處にも、宇宙、人生、自然の一切に生命は充實してゐる

自分はこの瀾漫した生命に觸れて歡喜の聲をあげる。

人々よ、君達は此の宇宙が空虚のものと思へるか

一五五



オ、自分の感動が空しいものと思へるか

## 或る夕

太陽は赤く、地球は緑

自分は共に並んだ大きな健全な夕暮を見た、

山にも丘にも緑は伸びたり、伸びくと伸びたり

宛ら岬のごとく静に伏したり

この時鶯は緑の茂みから歌ひ出た。

感謝に満ちた清い呼吸をこめて、その小さな胸を震はした、

オ、自分も歌ひ出よう

宇宙は狭からず、一國、一都府に限らるゝもので無い

健康の思想は、健康漲る天地から許り湧き出る。

## 夕景

太陽は隠れた。山を降らう、低いところへ  
川瀬の聲もまつたく絶えたところへ  
彼處此處の道から百姓が下りて来る  
重い荷を負ふその歩みは遅く  
宛ら一寸一寸去る夕暮の歩みに歩調を合はして居る様  
荷を負はぬ吾が足は餘りに早し  
願れば夕靄の棚曳くところ  
飛びくりに山々の頂きが遠近に浮んで居る。  
夕暮の天使のごとく黒い翅を休ませてゐる、

## 太陽

太陽よ、汝最大の恩惠者  
吾等は倦み、疲れ喘けども  
汝は嘗て倦む事を知らず  
才、何萬年を貫いて倦まざる力もつ  
汝最大の征服者、太陽よ

## 港にて

一六〇

此處は方がくも知ら無い、異境の港  
夜は十二時、寒さはげし

港の暗き水は山に連り

舷燈の光力無く、

吾が思ひは繁し。

かゝる夜を船に乗る人は一室に集り

知らざる人も知れる人も無言を守る

何故ぞ無言を守る。

中に年若き五六人の支那人あり、袋をかゝへてもの思はしげに、異様なる眼を光らせ  
り

忽ちけたゝましい太き汽笛聞ゆ、

音も無く海峡を大なる船の横切りし合圖なり

忽ち止む。應へもなし

何故ぞ凡てのもの無言を守る。

こゝは方がくも知ら無い異境の港。

一六一

## 都會を出で、

一六二

堅牢な屋根と石疊もつ薄暗い大停車場を出て  
汽車は今大きな鐵橋を渡る。高まりつゝ空中を渡る

オ、その時の歡喜

明るい四圍の眺めは自分の心を奪ふ

西の窓からは沈んでゆく赤い太陽と紫だつ雲の層の湧くのが眺められ

さかなな夕日は車中の吾等の顔を一杯に染め

河には潮のあげてゐる充實した騒ぎ

兩岸の青い畑の静かさ

岸には小さい孤獨な釣人と、堤の上に立ち歸る白シャツの荷揚人夫の群が靜かに見え  
る

向ふの窓からは今出て來た都會が遠く煤煙と暮色に包れて小さくなつてゆく。

オ、その時の歡喜、汽車は空中を徐々と渡つて行く

## 夏は來る

夏は來る

水と雲との夏は來る

どこからかやつて來る

大洋の彼方からか、砂漠の彼方からか

雷も炎暑も大風も來る

避け難い運命をもて地球の上に臨んで來る

夏の集團はやつて來る

水陸から太鼓を鳴らしてやつて來る

東西南北から白波を蹴立てゝ來る

黄金の旗をヒラ／＼翻へして來る

磨き澄ました銚や鎗を光らして來る

白い天府を張つて露營し乍らやつて來る

一六三

日に日に到着した處で豪爽な饗宴を張つてやつて來る男裝した非常に美貌の女の將軍も交つて來る相だ。陣中ではこの女將軍を神の様に兵が崇めてる相だ。又美しい娘を澤山もつてゐる家族同伴の將軍も來る相だ。この將軍の周りには一杯若い將校がくつついてゐる相だ。赤ん坊を連れた體格のすばらしく立派な母親も來るこの母親は美貌ではないが姿が非常に美しくその上勇壯で、この女の爲めに澤山の悲壯な戀愛詩や、崇高な讚美詩が誰がつくつたのか陣中に流行つてゐる相だ。その他女等はふりむきもしない醜男の將軍や無数の男女の英雄が萬里をもとめせず遠征にやつて來る。

### 一物もなし

夕ぐれ、輪形の星、きらめきいづる時  
 吾が心は呼べり  
 吾は人々を拒みれば、今一物もなし  
 オ、吾が拒みしものよ  
 吾れに來れ  
 吾が拒みし同胞よ、吾に來れ  
 オ、吾れ、今一物もなし、憐れ一物もなし  
 吾れは無なり、吾は空なり

## 清らかな景色の中で

一六六

河原の中の清い小川の流れの前の  
小草が緑に生えたところに  
白くは見えるが汚れたシャツを着た老人が坐つて  
大きな椀で晝の辨當をつかつてゐる。  
老人のうしろは廣い河原で  
そこでは仲間が砂利を掘つて運んでゐる。  
荷馬車が遠くに置いてある。  
自分は堤の上に轉つて遠くから見えてゐて感動した。  
清い流れを前にして草生の中で  
辨當を使つてゐる老人の姿は  
まるで子供の様に美しく見えた。  
老人は食べてしまふと椀を流れてゆすいで居た。

町噺に靜かに何べんも何べんもゆすいで居た  
自分は美しくしいと思つて涙ぐんだ。  
こんな幸福な生活がどこにあらう  
が自分達はこんな生々した、こんな美しくしい生活からはどんなに遠ざかつてゐるだらう

こんな美を味ふ事が出来なくなつてゐるではないか  
老人が食べるのを止めた時分  
又一人の若い労働者が老人から二間許り離れた上かっに坐つて  
同じ様に清い流れを前にして辨當を使ひ出した。  
胡坐をかいて、片手に辨當箱をのせて膝の上に休め乍ら四邊の景色を見てゐる。  
食べる事も忘れた様に、  
感謝を捧げてゐる様に。  
いゝ天氣で遠い山々や河原や麥島は透きとほる様な景色である  
こんな清らかな景色に包まれて

一六七

その中で働いたり食べたりするのは何と云ふ應はしい事だらう  
自分はこの自然に何と云ふ應はしくない多くの事をしたり、考へたりして暮らしてゐるのだらう

自分はまるでシヤバンヌの繪にあり相だと思つた。

まつたくその儘立派な壁畫だ

自然の風景も労働者も共にとけ合つてゐる

どこにも無理がなくそのまゝだ。

自分は涙ぐんで堤の上を歩いた。

あゝそれに比べて自分の生活を思ふと

何と云ふ恥づかしさだ。

この透きとほる様な景色の中で

堤の上に寝ころんで、煙草をふかして

何を俺の頭は考へてゐる

恥づ可き、卑しい事を空想してゐる

オ、恥ぢよ、恥ぢよ。

## 母の言葉

一七〇

弟の死んだ時、悔みに来て呉れた多勢の人達が去つて  
亡き友の、君が泊つて呉れて二人で差し向ひに残つた時  
ふと隣りの室にもう寝たと許り思つた母が  
まるで弟が忘れものでもした様に突然獨言を云つた。  
とまざくと自分は死んだ弟が生きて来る様に感じた。  
あきらめ得ないやうなその情愛に溢れた言葉は  
自分か誰かに同感を求めてゐる様に感じた。  
自分は母の寂しさをその時位深く感じた事はない  
自分は夢中で襖を開けて  
弟の赤ん坊の時の寫眞を寝てゐる母に  
「これ」と云つて渡すと  
母は寢床の中から片手を伸ばして

引きたくる様にとつて肌へちつと抱いた  
自分達は三人均しく弟を思つて泣いた。

幾度、幾度泣いても涸れない涙は新しく堤を破つて溢れ出した。  
隣りの室で友が襖にぶつかつて、烈しく泣いたのを覚えてゐる

あゝその時の母の言葉

本當に未だ生きてる人に云ふ様な母の言葉

無限に愛の溢れた言葉

あの時の言葉は何だか忘れた

然しその言葉はまざくと自分達の胸にもう一度弟を生かした

消えてゆく火を掻き立て、死者を甦らす力があつた。

思ふに自分達が死者を悲しむのは

死者の意志や人格が自分達の内に消えずに残つてゐるからだ

死者との交渉はその肉體に無く精神にあるからだ。

死者は死なない、この言葉は嘘でない氣がする

一七一



すくなくとも愛あるところ死者は死なないと云へる  
死者をも甦らすのは愛である。

あの母の言葉は簡単な言葉であつた

今はもう忘れた位簡単な価値のない言葉であつた。

然しその言葉は精神から出た言葉であつた。

死者を死者と思はぬ言葉であつた

弟がすぐ身の周りにゐる様な言葉であつた

死んでからもその子の運命を思ふ母の言葉であつた

それは單純な萬人の母の言葉であつた

自分はその言葉の意味を忘れた

然し自分はその時の事は忘れない

あの母の精神を忘れない。

## 裸の女

泣いてゐる、泣いてゐる

眞裸の女が泣いてゐる

恥ぢと恐れに包まれて

裏切られた女が一人

永遠の中に突き遣られ

蹴落された女がひとり

父も無く、母も無く、兒も無く

オ、救ひ手も、希望も無く

蔽ふところも、蔽ふ衣もなく

恥ぢも身も忘れて、夜の闇の底に

誰も顧みては呉れ無い真心の涙が  
淋しい闇へ落ちてゆく  
絶えず涙は滴り落ちる、夜の闇の底へ

## 人外境

日が照つて居る  
そこに黄色い小さな土の國がある  
自分はうつとりそこを眺めて居る。  
そこには未だ誰もゐない。人外境だ。  
黄色い日の照る人外境だ。  
悲しい時や泣いた跡なぞに自分はしやがんでうつとりそこを見る  
そこは蟻の殖民地かも知れない  
けれどもそこには今誰も現はれ無い  
あゝ小さな、然し何と云ふ大きな領土だらう  
際限も無い廣い荒蕪地を有つ誰も居無い土の王國、  
黄色い日の照る土の國  
私はその王様になつた様に

泣かずにうつとりそこを見守つて居たい  
 いつまでもその側を離れずしやがんで居たい  
 誰が私を呼んでも私は顧みまい  
 たゞ私を探しに大きな御母さんが側へ來たら  
 御母さんだけにはそつと知らして遣らう  
 御覽なさい、御母さん  
 この黄色い王國を、  
 こゝに私達は住みませう。

## 港 で

静かな港から煙は騰る  
 大きな幅廣い煙は、雲よりも高く  
 その姿は雲よりも恐ろしい。  
 大きな作業の鍛鐵の響と荷積みの掛聲は  
 波の音より高く盛んだ。  
 港を歩く人々の忙しない様は  
 オ、何と氣短かな事よ  
 悠々とした自然の大きさに比べて。

(五月)

## 散歩

一七八

何も欲しくはない  
何も買ひたくもない  
只町を歩くのは面白い  
孤獨な自分を皮肉に楽しませて歩くのだ。  
遠くの方から見てもと  
知らない人も知つてる人のやうに見える  
けれども俺は鳥の様に地面へ下りてるのだ  
危険が近づいたらすぐ飛び去るのだ。

## 草

草よ、草よ  
自分は御前を愛す  
生氣ある御前の緑よ  
虹の中でなくては見られ無い様な  
御前の萌える緑が自分は大好きだ。  
草よ。  
御前達はどこから来たのだ。  
どこから此の土地へ移住して来たのだ  
飛んで来て地にさゝつたやうな草よ  
どこかに御前は御前の故郷をもつてゐるにちがひない  
俺達にそんなに遠くないところに  
草よ、御前の故里はあの空にあるのか

一七九